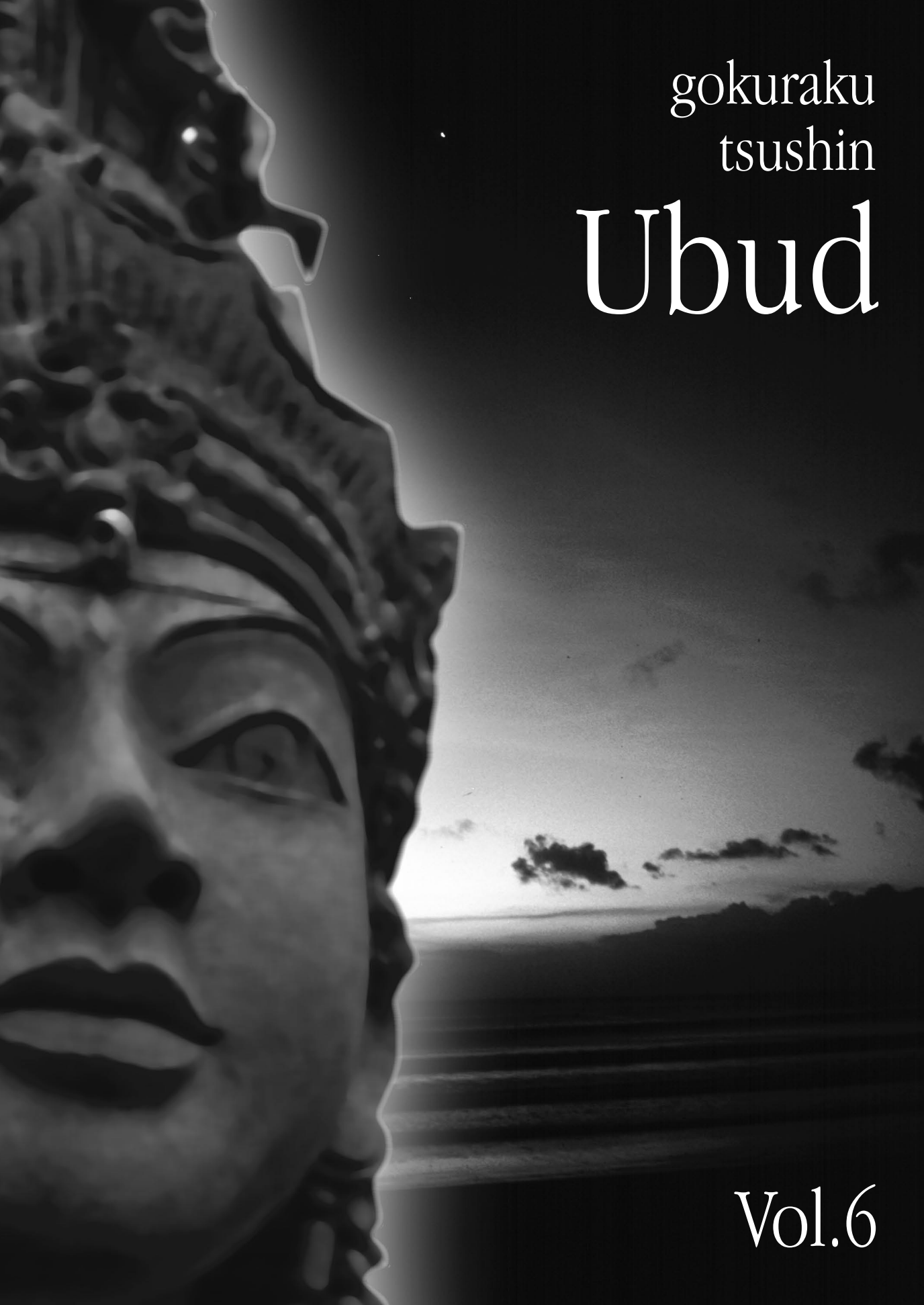


gokuraku
tsushin

Ubud

Vol.6

極楽通信
UBUD

U・B・U・D ◆ I・N・D・A・H

photo: Y. Hori

私はオダランが好きである。もちろん華やかな衣装の村人やお供え物もすてきだし、夜通し行われる踊りや演奏などの出し物も好きであるが、一番好きなのはそこに漂う空気の感触である。オダランの行われている寺院は空気がいつもと違う。私はなにかが寺院全体を包んでいるような不思議な感覚をいつも覚える。オダランの行われていない時にその寺院を訪れると、その場所は確かに神聖ではあるが、神様が留守というようながらんとした感覚がある。ところがオダランともなると、一気に寺院中に気が満たされるように空気が変わる。これが果たして神なのか人々の精神の昂揚によるものなのかはわからないが、この空気感がたまらなく好きである。

これはある意味では大きな競技場やコンサート会場で見られるファンの熱気のようなものと同じ感覚のものかもしれない。だが、寺院で感じるものはそれらとは違う気である。なぜならばそこで感じる気は人間としての心に通じる、とても平和な、とても懐かしい、とても喜びに満ちた感覚だからである。だから私はオダランが好きである。

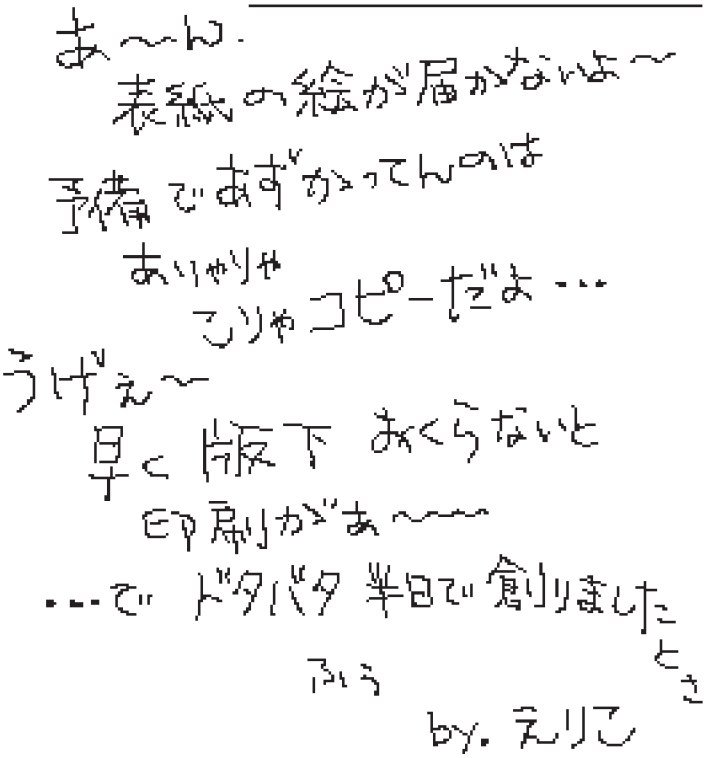
堀　祐一

Vol. 6 1994 Desember

Contents

● Kabar Baru Berita Lama
懐かしのセゴール ---- 4
長期滞在 ---- 5
● Culture Shock
Tidak Apa Apa ---- 6
ガムラン（Gamelan） ---- 7
● Belajar Tari&Gamelan -6-
私と踊り ---- 9
● C・O・L・U・M・N
ピース・ピース・メーン！ ---- 10
● Ubud Buku Catatan Harian
うぶどぅ日記【1】 ---- 12
● UBUD よろず百科
バンヤン樹／ Bingin ---- 18
● P ちゃんのクタでクタクタ <1>
クタのココナッツツリー ---- 20
● Tulisan Bersambung
とっておきの瞬間 ---- 21
● Enak･Enak･Ubud おいしいものに目がない
バリジンノ ココロノトモ Sambal. ---- 22
● Pelajaran Bintang
バリ島・星空散歩道〔4〕 ---- 24
● Toko　BEST 店
TUTURUGA ---- 28
● Warung　味な店
MUMBUL'S ---- 28
● Pondok Manis　私の常宿
AGUNG RAKA BUNGALOWS ---- 29
● Pesan & Kesan　旅人一声 ---- 29
● Apa it? ---- 30
● Ubud の環境を考える ---- 30
●その他のニュース ---- 31
●ウブッな人々 ---- 33
● Studio　スタジオ ---- 34
● Pengumumaan　伝言板 ---- 34

○表紙のことば○



編集室便り

●入稿に関するお願い

編集部では、Macintosh による DTP 作業で版下を作成しています。原稿をお寄せくださる方で Text Data で入稿可能な方は、以下の方法でお願いします。

□ Macintosh フォーマットの FD (Text Data)
□ Dos フォーマット（2DD-720KB / 2HD-1.44MB）の FD (Text Data)
□ Nifty-Serve の Mail
（宛先 ID/ MHC03202: 菅原 or GCB01162: 堀）

※詳細は、裏表紙にある日本連絡先事務所までお問い合わせください。

懐かしのセゴール

Shibakichi

バリに長期滞在し、母なる大地から何かを学ぼうとしていた当時のぼくは、まず手始めにバリ・フルマラソンに出場しました。4時間で完走はしたものの廃人同様になり、ゴールのサヌールにある高級ホテルで行われたパーティーで出された、いわゆるチャーハンの様なナシゴレンに満足できず、その日のうちにウブドに帰りロスメンのイブにナイトマーケットからナシゴレンをブンクス（テイクアウト）してもらい、それから3、4日の間、立ち上がることもできず、毎日のようにナシゴレンを食べ続けました。

言うなれば苦学生であった当時の僕の胃袋は、いつもナイトマーケットのナシゴレンでいっぱいでした。体育会系のストイックな肉体と、アーティスト系のアバンギャルドな精神が同居した僕の体は否応無ダンスに向けられ、次なる挑戦はバリス・ダンスでした。日常的な身体を解体し、再構築していくエクセサイズ。師匠のコンピヤンいわく、sweet. gentle. strong な肉体を目指す練習が始まりました。たった2時間とはいえ、胃袋はからっぽになります。そんなとき、やっぱりナイトマーケットのナシゴレンでした。

そんなある日、僕は突然高熱を発し、手足が麻痺し、耳が遠くなり、母なる大地を学ぶどころか、母なる大地に永遠に眠ることになりそうなほどひどい病に倒れました。その時ばかりはブブルを作ってもらいましたが､師匠いわく「シバ！　ナイトマーケットで安い飯ばかり食べているから病気になるんダ！あそこは時々古い油をつかっているからワシなんかはめったにあそこでは食べないぞ！」とお叱りを受けたのですが、そういう師匠も、家で食べそびれたとき一人寂しくナイトマーケットで食べているのを何度か目撃しているのですが、それはさておき。

何故、ナイトマーケットのナシゴレンだったのか？　ひとつにはとにかく安い。週に一度のレストランの食事は高級すぎて味気のないものになっていました。次に味ですね。これは何故か毎日食べても飽きが来ないのです。何故そんなにうまいのか？その謎はバリニーズの食に対する考え方にあるのではないでしょうか？　ただ食べるなかにも喜びを感じる何か･･･。たとえば儀礼のなかでもお米は重要な神具、つまりアミニズムで言う神の宿るものだから、それを口にすることは単なる食を越えて･･･。話が難しくなりますね、とにかく神の与えた豊かな実りを口にする喜びがうまさの秘訣ではないかと僕は考えます。ナシゴレンひとつにも神秘性を持ち込みたがるのも困ったものですが、オイシー！シアワセー！カンシャー！というのも突き詰めると宗教的な概念の根本という気もしませんか？　そして、バリの庶民の味ナシゴレンが血となり肉となった頃、コンピヤンの指導は肉体的訓練から精神の訓練へと変化していきました。

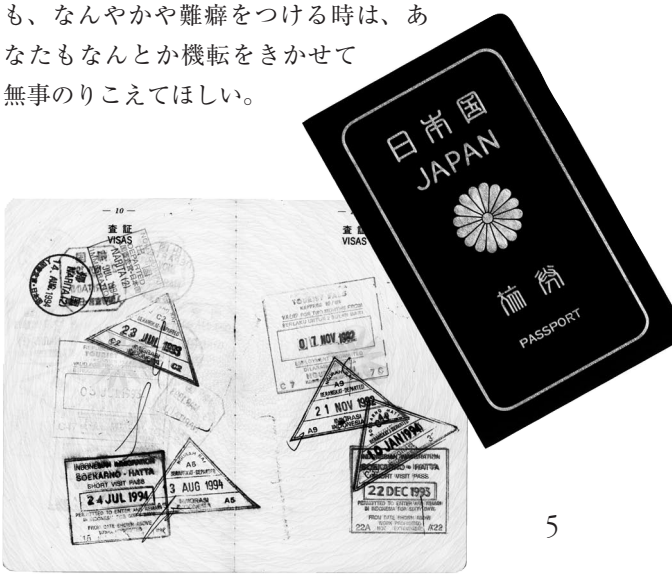
そんなわけで、当時の僕にとってナイトマーケットは日常の一部でしたからナイトマーケットがないということはウブドの日常の一部がなくなってしまったようで少し寂しい気がします。

長期滞在

バリ島に長期滞在したいと望む人が増えてきたようである。また実際に増えているようでもある。確かにバリ島は「最後の楽園」とキャッチフレーズされるのにひとしい素晴らしい土地であり、訪れた人々誰もが住みたくなるのは当たり前と思う程魅力のあるところだ。そんなバリにたとえばツーリストが長く滞在しようとする場合どうしたらよいのだろうか。観光目的でバリに滞在する場合、60日以内はビザは必要がない。それが過ぎる前に出国しなくてはならない。3年程前にこれが180日延長されると言う吉報が流れたがそれは噂で終わってしまったようだ。60日に一度出入国を繰り返して長期滞在している人がたくさんいるようである。何度も出入国を繰り返しているうちに空港のイミグレーションの役人に別室に呼ばれ「ビジネスでもしているのか」といじめられ袖の下を請求され、嫌な思いを経験した人もたくさんいると聞く。これも堂々としていればなんの問題もないことなのだが。インドネシアでは60日以上の滞在もしくは観光以外の目的の滞在はビザを取得しなくてはならない。ビザには文化を学ぶ目的で取得できるソーシャル・ビザ、仕事に関するビザにビジネス・ビザがある。どちらもインドネシア国内で収入を得ることはできない。インドネシアで収入を得てもよいというビザはKIM'Sというビザに含まれる。このビザを取得するのはかなり複雑な手続きが必要のようだ。どのビザもインドネシア人のスポンサー（保証人）を必要とする。まず、このスポンサー、とにかく信頼できる人でなくてはならない。スポンサーが無事みつかり提出する書類もすべて揃い、そこで初めてインドネシア以外の国でビザの取得に出掛けることになる。手身近な所でシンガポールにひとっ飛び4週間のビザを手にいれ、バリにもどってくる。そしてバリにて2ヵ月づつビザの延長をする。この時、イミグレーションでの手続きがややこしいという理由であきらめてしまう人が多いようだ。確かに日本と比べると事務処理がルーズではらだたしいものを感じるが、これがバリのイミグレーションでは普通と思って付き合ってほしい。一日3時間待つつもりでそれを10日間通うつもりでいればなんとかなるだろう。バリに住めると思えばこんな苦労も苦労でなくなる。そんな煩わしいことは嫌だとどうしても安易な方法に走ってしまいがちで、ビザの取得の代行をしてくれる人がいて、その人に頼んでしまうという例もあるが、どんな手続きにせよ必ずスポンサーと本人がイミグレーションに出頭しなくてはならないことになっているのを覚えておいてほしい。

なんといってもここはインドネシア、イミグレーションの役人の制服を簡単に購入することもでき、スタンプも簡単に作ることができるお国柄。ツーリストが贋のスタンプを押されることもあるので注意してほしい。またイミグレーション以外の場所でスタンプを押すことはないのでこれもHati-Hati。最近イミグレーションの役人と偽り、贋のスタンプを押していたバリ人がタイホされた。何人かのツーリストが被害にあい、不法滞在で拘置されたり、国外退去させられたと聞く。

「イミグレーションを面倒がらず、怖がらず通ってください」とはイミグレーションのチーフの言葉だが、正式な手続きをし、不当な理由がない場合でも、なんやかや難癖をつける時は、あなたもなんとか機転をきかせて無事のりこえてほしい。



Culture Shock

1

TIDAK APA-APA

寺西由希子

私が初めてバリを訪れたのは5年前の12月。以来、計6回、でも合計39日間の滞在というほとんど初心者の私がこんな所に顔を出すのは恐縮なんですが、あくまでも私のカルチャーショック体験とうことで、サラッと読み流していただければ幸いです。

バリは、初めての時のみならず、今でも私にカルチャーショックを与えてくれます。夜中に何度起こされたかわからないトッケーの鳴き声（今じゃ聞こえないと眠れない）、紙が流せないトイレ、たくさんのジャワ人が出稼ぎに来てること、芸術が生活の一部になっていること、ガムランの生の迫力、CDで聴いたら耳障りだったのに生で聴いたら実は一番気持がよかったチェンチェンの音 etc...
でもその中に私の性格までも変えてしまったカルチャーショックというのがあったんです。

その昔、私はとても神経質な人でした。自分に厳しく、しかも他人にも厳しく、面白いことを言って人を笑わせたりすることもありましたが、どこかキツい所がある嫌な奴でした。そんな私がBALIにやってきて目にしたことはUNBELIVABLEなことばかり。まずクタにて通りを歩けば若い子がボーッと店先に座っている。店番なんかじゃなくてギターを弾いてたり、ダベっていたり、通行人にちょっかいかけたり…。真面目な私の心の中は（働けよ！）。しかもナシ・ゴレンやらBAKSOやら食べたりしている（道端で食べるなんて！）。ホテルでもレストランに壁がないので夜になると虫だらけ（あーっ！虫がごはんに！ストローに！）。ツアーの観光で連れていかれたバティックや銀、木彫り、絵のお店、値段があまりにも高い。値切って買ったけど後でやっぱりそれでも高かったと知る（ひどーい！やられたー！）

本当に嫌でした、嫌で嫌でたまりませんでした。でもバリ旅行のお目当て、生のガムラン演奏に心を

打たれて気持が解放されていく内に気が付いたんです。
「別にええやんか」———昼間は暑すぎて働いてなんていられないし、虫だっていちいち気にしてたら食べられへん、、虫がついたからって食べても死ぬ訳じゃなし、お店でボラれるのだって実際その金額で買えるだけのお金を持っているんだし、その時は自分で納得して買ったんだし…。

これが「ティダ・アパ・アパ」ってやつなんでしょうか？なんだか心を覆っていた堅い鎧が少しづつくずれていくのを感じました。そしてくずれかけの鎧を一気に吹き飛ばしてくれた出来事のきっかけを影武者でつかんだのでした。

私にとってバリは2回目。妹は初めて、でもUBUDは私にも初めての時でした。2人で初めての影武者を訪れた夜、伊藤さんに声を掛けられたのです。「今晩お祭りがあるので一緒に行きませんか？」———閉店後、まずはガイドのワヤン・カルタさんのお家に行って、家族の方にサロンを着せてもらって、みんなでテガランタンの小さな寺院へ…。そしてマネ事だけどヒンドゥーの神様にお祈りして、聖水をかけてもらって…、もう言葉では言い表わせない程感動的な体験でした。本当にささやかな、それこそ観光客がたくさん押し寄せるダラム・プリでのオダランとは比べ物にならない程小さなお祭りなのに、ヒンドゥー教徒でもない私たちに祈らせてくれ、聖水をかけてくれた———これを寛容と言わずして何を言おうか、と目からうろこが落ちる思いで一杯になったのです。

私は生まれ変わりました。もう細かいことでぐちぐち言いません、悩みません。"TIDAK APA-APA"お陰ですっかり気持が楽になりました。人にもやさしくなりました。キツいギャグからトゲが抜け落ちて、単なる大ボケになりました。
高校時代からの（10年来の）友人たちに「性格が丸くなった、肩ひじが張った所がなくなってリラックスしている」と言われるまでになったのです。これを"TIDAK APA-APA"のお陰と言わずして何と言いましょう。時々悪用・誤用してしまいがちですが、私はこの"TIDAK APA-APA"を信条にして人生をまっとうしようと思っています。

2 ガムラン（Gamelan）

南部ヒロシュ

ゴン・クビャールに代表されるバリの近代ガムランは素晴らしい。これを認める事の出来ない人は、音楽の構築美という物が全くわかっとらーん、と断定し、以降は相手にしない事とする。さよなら、以上。さて、構築美と様式美を混同している人が多い様だが、バリの近代ガムランは、楽曲の構築の美しさが様式の美しさをはるかに凌いでいるという点において、他の地域の民族色の濃い音楽のみならず、同じインドネシア国内の他のガムランと比較してみても、かなり特異な存在である、と言えるのではないだろうか。その編曲たるや、常軌を逸しているとでも言いたくなる程に綿密に計算された複雑さを究めており、曲を完全に覚えないと乗りが取れない程で、踊りのバックミュージックとして発展してきた音楽にあるまじき極悪非道さである。例を挙げれば、突然の衝撃音に沈黙の頻出、単一主題上に折り重なる装飾音、目まぐるしく変わるテンポに性急な曲展開、更にはこれらを可能ならしめる為に演奏家に要求される極度の集中力。そう、これはまさしく現代音楽の手法そのものであったりするのだ。ところが、あれだけ複雑な編曲が施されているのに楽譜がないんだそうだ。なんてこったい。２０人からの大編成の楽団が、楽譜も見ないでどうやってアンサンブルを完成させるのか、その過程に興味があったので、あるグループが新曲をレパートリーに加える為のリハーサルをしている練習場に見学に行った事があるのだが、先生らしき人、及び曲を熟知しているとみられる２、３人が、「はーい、そこ違うよ、ノネンノネンノネーン」と言うのに合わせて音を探っていく、といった具合で、考え得る限りで最も効率の悪いやり方をしていた。間違った奴が特にメモをとっている様子もない。こんなやり方であんな複雑に絡み合った曲を覚えるのか？この調子じゃいつ完成するか判らんな、と思っていると、一週間後のス

テージで素晴らしい音を響かせていたりする。天から降ったか地から湧いたか、それはもう、唐突に強力なアンサンブルが出現するように見えるのだ。あんまりにもスマート過ぎる。実際の所は一体どうなってんだろう？では、我々が最初にガムランの生演奏に接した時に受ける衝撃の原因を、冷静に考えてみよう。通常、我々は『民族音楽』と聞いた時に、浮遊感がホンワカした気分にさせてくれる、環境音楽の様な音を期待するむきが多いのではないだろうか。ところがガムランは、ご存じのごとく、あの音量だ。本物を生で見る前にテープやＣＤ等で聴いていた人もいるだろうが、まさかあんな馬鹿でかい音量で演奏するとは思ってもみなかった筈だ。いやいや、予想外なのは音量だけではない。音色も凄いぞ。きらきらしていて倍音を多く含んでおり、音がぶつかるなんて生易しいもんじゃあない。ジャラーン、ジョレーン、ギョワギョワン、ビョロロビョロロロロビョロロ、ガシャガシャ、である。耳が痛い。心の準備をせずに、「せっかくバリに来てんだし、一回くらいは民族芸能でも見てみっかー」てな軽い乗りで経験した者が、「な、何だ？」と、戸惑い、消化不良のまま拒絶反応を起こす場合があるのも納得出来る。因みに、客席で聴いて、「で、でかい、う、うるさい」と思う程の音量と音質で演奏する時、音源の至近距離にいる演奏者が正しい音程を把握する事はこの上なく困難な筈である。ステージ上は殆ど轟音、いや、爆音とも言えよう。強烈な音色、激烈な大音量。でかくて騒がしい音（例えばヘビメタ）が好きな俺の血中アドレナリン濃度はぐんぐん高くなる。パワー全開！スピードだスリルだ手加減すんじゃねえぞぐいぐいやれー！思わず汗ばむ拳を握りしめ、いけー！そこだー！うりゃー！とりゃー！ガラムを一本吸って落ちついたところで（ぜえぜえ）、楽器編成、及び楽器自体に目を転じてみよう。ここにも我々の常識では考えもつかない様なインパクトが待ち受けている。良く知られている様に、ガンサに代表される鉄琴状の楽器は殆どが２台一組となっており、意図的に僅かに異なった調律がなされている為に、ユニゾンで演奏するとドップラー効果を引き起こし、この『うねり』が音の深みが増す、という、実に凝った物理構造をしているにも関わらず、この一組の楽器で表拍子と裏拍子を弾き分けて一つのフレーズを構築する、『コテカン』というウルトラＣ級の必殺技を頻繁に用いるにいたっては、前述の素晴らしい物理構造を自ら無視するものであり、これはもう滅茶苦茶と言えよう。簡単に例えるならば、１、３、５弦と、２、４、６弦を異なった基準音でチューニングしたギターでアルペジオ奏法をする様なもので、極端に耳のいいピアノの調律師なぞは発狂してしまうかもしれない。所謂、不協和音と言われる音にも、綺麗な不協和音と、汚い不協和音の２種類あって、『ちょっとだけずれている』ガムランの不協和音は後者の方で、この不協和音により演奏される音楽は、西洋音楽の整然と配列された音階に慣らされた我々の耳には『雑音』の筈なのだが、何故か結果オ－ライな気持ち良さがある。音の層の中に埋没しそうなメランコリックな主旋律が、日本人の感性に合っているんだろうか。それにつけても、観光客からは「若い頃からやってるんだから、俺達には難しくても奴等には簡単なんだろ」と、開き直られ、オダランでは、踊りが終わるとさっさと帰ってしまう客の背中を相手にエピローグを演奏するガムラン奏者達。踊り手が主役、ガムランは脇役、それが当たり前なのかもしれない。割に合わないよな。ミュージシャンにスポットがあたらないのは世界中どこでも同じなのか……「ステージではかっこいいんだけど、普段は気のいい兄ちゃんなんだよねー」と、言われがちなガムラン奏者の名誉の為に、とりあえずこれだけは断言してしておこう。ガムランは、Tidak apa-apa で出来る様な、お気楽な音楽ではなーい！

▼クンダン奏者の手。動きが早すぎてカメラに捉えられない。

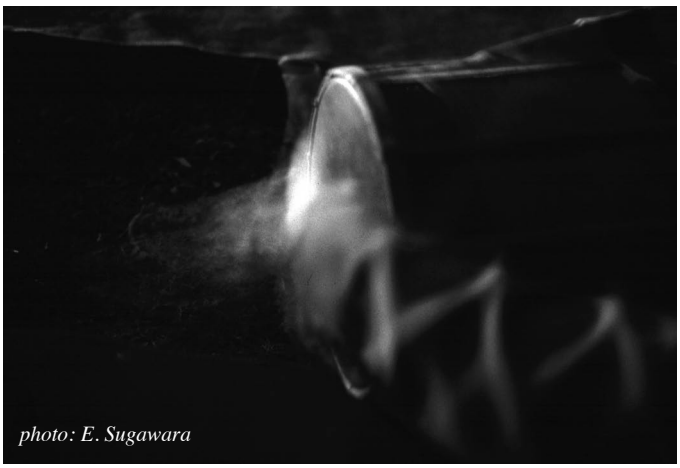


photo: E. Sugawara

Belajar Tari & Gamelan

◇シリーズ◇　私と舞踏とガムランと　6

私と踊り

大久保美樹

長い間、女･Mは自分を城の中に閉じ込めていました。いや、閉じ込めていたという意識はありませんでした。城の中には生きていくために困らないだけの事が、全てありました。気持のいい笑顔をつくってくれる人たちもたくさんいました。女･Mは、自分がそこに存在するのは当然、と自分を信じこませていたのです。

しかしそこには何かが欠けていました。何かが違うのは明らかでした。でもそれが何なのか、女･Mにはわかりません。それでも、どうしようもなくそのことを感じてしまうのです。

とうとう女･Mは自分の想いに目をそらすことができなくなりました。ここにとどまることはできない――。

女･Mは城を出ました。さまざまな想いを抱いて。不安、期待。もう戻れないことを思うと気が狂いそうでした。

たどり着いた南の島は、女･Mをやさしく迎え入れてくれました。

そして女･Mは踊り始めました。欠けていた何かが見つかるかもしれないという理由だけで。

初めは思うように動かない身体にいらつき、自分が間違ったことをしているように思えました。

部屋に戻ると、温かな城の生活が頭をよぎりました。

それでも女･Mは踊り続けました。

そのうち不思議なことが起こり始めました。女･Mは踊っている自分がどんどん素直になっていることに、気付き出しました。知らない間に自分の本当の姿が現れてしまうのです。

もはやその時の気分やら状態を隠して踊るなど、不可能でした。いくら格好つけようとしても飾ろうとしても無駄でした。MにはMの踊りしかできない――。

無理せず頭で難しく考えず、身体と心が感じることに女･Mは耳を傾けました。その通りに動いてみるととても心地よいのです。音・周りの空気・自分が一体になる瞬間を求めて女･Mは踊りました。自分が大した踊り手ではないことはわかっていました。それでも踊る時は全身全霊で踊りました。この島で踊れる全ての要因に感謝しました。女･Mはそれ以上でも以下でもありませんでした。MはMでしかないのです。

今でもMは、ゆるやかに踊っています。

COLUMN

ピース・ピース・メーン！

語り：Rama / 翻訳：猫たちの母

やあやあ！！はじめまして！ボクの名前はRama、オスのトラネコ、ただいま1歳と1ヵ月、花の青春時代です。生まれて間もなくUbudのJl.Suwetaのドブに捨てられていたボクと妹・シータをMOMOYAのジェロ姉さんがひろってくれて、今はPengosekanで大勢の家族と一緒に暮らしています。ちょっとしっぽが短いけど、これでもよく、「あら、ラーマくん、ガンタンね」って日本人のcewekに言われるんだ。さて、インドネシア語でネコのこと、Kucing（クーチン）っていうんだけど、バリ語では何て言うか知ってる？ Meng（メーン）とかMeong（メオン）っていうんだ。ボクのお母さんはたまたま人間だけれど、よその友達に聞くとボクのようにりっぱな名前までもらって人間に大切にされるコってあまりいないらしい。たいていは勝手に人間の家の台所のすみとか屋根裏に住みついているみたい。ボクの近所では、ニワトリやブタなんかともけっこううまくやってるヤツもいるけど、犬はイヤだなぁ。やたらとボクたちを追いかけまわすんだ。でもって草むらでつつましくアウトドアライフを楽しんでる子ネコを、食っちまったりするんだ。あぁ、憎たらしいたらありゃしない。

そしてボクたちにとって、生命にかかわる問題は他にもある。ひとつは病気。ボクと妹のシータがここに来るずっと前、お母さんはとってもたくさんのネコのめんどうをみていたんだけど、ある日、誰かがどこからかとても恐ろしいネコの伝染病をもらってきてしまった。そしてみるみるうちに13匹。発病してから3日くらいで、苦しんで苦しんで死んでしまうんだって。その時はデンパサールから呼んだお医者さんも、「この病気は、かかったら助からないんだよ」って悲しそうに言ったらしい。だからその時生き残ったお兄ちゃん、お姉ちゃん、そしてボクたちに、お医者さんはとってもイタ〜イ予防注射をしてくれた。え？お医者さんのこと？うん、ちゃんとした獣医さんだよ。Ubudにも、ブタやウシなんかを診る家畜専門のドクターがいるらしい。でもボクたちの先生は、日本やオーストラリアに研修に行ったこともあるりっぱなドクターなんだよ。ま、

いかんせん、ここはBali、この前避妊手術をしたお姉さんが、「お医者っていったってねぇ、ひどいもんだわよ、あそこは。」ってぼやいてた。ボクたちが"お医者行き"って呼んでる籐の大きなバスケットの中で手術後のしくしく痛むおなかをかばってうずくまっていると、お医者の家で放し飼いにしている犬どもがやってきてさ、「ヤイヤイ、おみゃーはどこのどいつだ」ってフンフン鼻息をかけてきて、「あん時はもう生きた心地がしなかったわね。」って言ってた。

そして、最近恐いのが車とバイク。ボクんちの前の道路、つい6～7年前くらいはただ田舎道で、ましてやこんなにたくさんの車がびゅんびゅん通るようになったのはつい3～4年前なんだって。おむかいのデワさんちに行くのもたいへんなんだ。日本では、ホラ、ネコを轢くとタタリがあるとかいうんでしょ？実はBaliでもいっしょでね、ネコを轢いて死なせてしまった時は、必ず遺体をねんごろに葬ってあげないと、その車、あとでたいへんなことになるんだってさ。だからみんなも気をつけてね。

さて最後にちょっと余談。
お母さんの知り合いでSさんというとても動物好きな日本人の女の人がいる。Sさんは、チャンディ・ダサに滞在中、トゥガナン村でいたずらな悪ガキにボール替わりにさせられていた小ネコをひろってね、なんとそのネコを日本につれてっちゃったんだ。ングラ・ライ空港でちょっとめんどくさい手続きをした後、空調を入れてもらった荷物部屋のゲージの中で8時間、そのコはガマンして耐えた。さぞ心細かっただろう。無事日本に着いてからの新幹線の中で、そのコはたくましいことにウンチまでして、今では"バハギアちゃん"（幸福の意味のインドネシア語）という名前をもらって、その名の通り、幸せに神戸で暮らしてるんだって。遠く、日本でボクたちバリネコの仲間が幸せに生きてるって考えただけでボク、うれしくなってしまう。

読者のみなさん、バリに来たらボクたちにも声をかけてね。バリではネコを呼ぶとき、こうやって言うんだよ。「ピース、ピース、メーン！」

【母からの悲しい後日談】

去る10月中旬のある日、これを語ってくれたオス猫のラーマは、家の真ん前の道路で轢かれ、即死しました。轢いた車はそのまま逃げてしまいましたが、今では彼は私の庭の片隅で安らかに眠っています。ラーマ君、気のやさしい、元気な、甘えんぼうでした。心から冥福を祈っています。

Ubud Buku Catatan Harian

1993.10.3~1993.10.15

1 ウブドという日記

取材・文
西村久美子

え〜、編集部では常々ちゃんと連載する連載が欲しかったので（笑）、以前個人的に書きためたという西村さんの原稿を、むりやり口説き落としてしまいました。（ホントは Bintang Draft とバーターで）
期待してください！これはちゃんと連載する連載で〜す！

●まえがき●

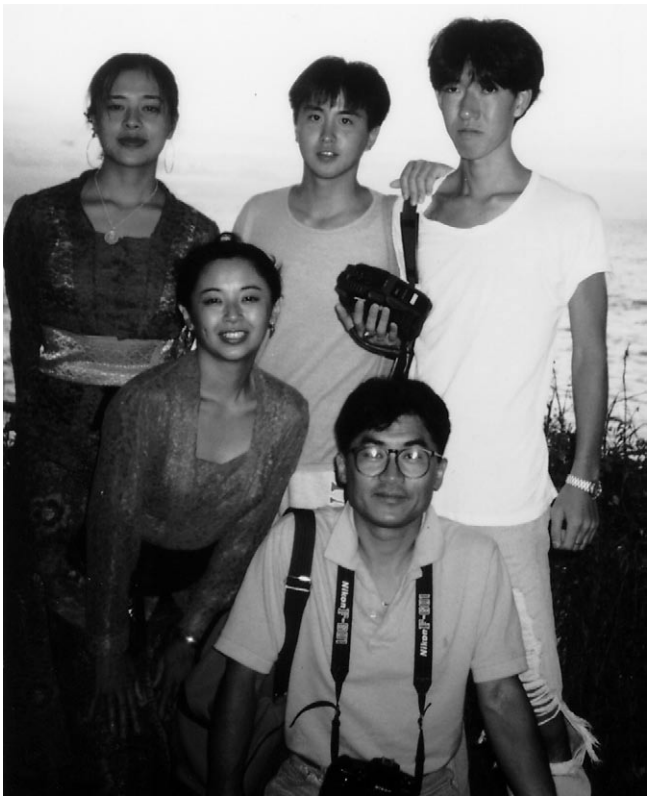
まえがきのある日記というのもヘンな話だけれど、名詞の肩書きに Writer とある身としては、自分の書いた文章を一人でも読んでくれる人がいるとわかった途端、その読み手のことを意識してしまう。この文章は、ウブドゥにいた２週間、毎日書き続けた日記であり、メモであり、お小遣い帳であるわけで、ワープロに打ち直すときに多少のリライトはしたものの、内容の全ては、Sehati のテラスで、レストハウスで、あるいはベッドサイドで、その日のうちに書いたものだ。お店や土地や様々な出来事の名前や記述は、その時に耳に入った情報と、その場で確かめ得た範囲のことで成り立っている。だから、聞き違い、勘違い、根本的な間違いがあるかもしれないけれど、後から資料を見て書き直すということはあえてしなかった。つまり、このまえがきは、そういうことへの言い訳です。早い話。２週間、思いのままに綴った日記をまとめたら、こんなに多量の文章になってしまった。取材旅行のときより真面目に書いていたことになる！こうしてまとまったものを読み返してみると、実にたくさんの出会いがあったなと感心してしまう。名前も聞かずにさよならした人もいれば、後ろ髪を引かれる思いで別れた人もいる。再会を約束した友もいる。そして、今私が一番会いたいのは、ウブドゥなのかもしれない。ウブドゥの空気のなかには、媚薬が潜んでいるのではないだろうか。そしてそれが、ビア・ビンタンや、サンバルソースや、アラックの中にとけこんで体にしみわたり、もう一度戻っておいでと呼びかけるのかもしれない。バリにいたときあれほど元気だった私が、東京に戻った途端、腹痛と高熱で寝込み、その間中考えていたのは、ウブドゥのことだけだったのだから…。

■ 10月3日(日)

7時30分頃、自然に目が覚めた。昨夜は雨のなかの遅い到着だったので、宿のまわりの様子は全くわからなかったけれど、2階のドアを開けた瞬間、飛び込んできたのは、咲き乱れるハイビスカスやプルメリアの花の鮮やかな色と、ヤシの木や隣のコテージの屋根。雨上りの空気も心なしか甘くて、思わず「きれい！」とひとりで叫んでしまう。私たちがこれから2週間滞在する「Sehati Guest House」は、3棟×2室のコテージが並ぶロスメン（民宿）風ゲストハウスだ。竹を組み合わせた天井や壁、ココヤシで葺いた屋根、板張の床とそれに続くテラス。快適なコテージは、自然の素材だけで造られた、とても堅牢な建物だ。ベッドカバーやテーブルクロス、壁に掛けられているのは、グリーンを基調にしたバティクで、素朴な作りの部屋には何よりも似合うインテリアになっている。夕べジャンケンで勝ち、この2階の部屋を獲得した私は、テラスの竹のベンチに腰掛けてしばらくボーッとしてしまう。部屋から歩いて5歩の東屋風の建物がここのレストハウス。大きなテーブルと竹の椅子が置かれたオープンな作りのこのレストハウスで、早起きのタカシとタッちゃんがすでにお茶を飲んでいた。「お飲み物は何にシマスカ？」という質問に私はバリコピをオーダー。ドロっとした濃い色のコピは、飲んでみると少しも胃にもたれなくておいしい。今朝のメニューは、バナナパンケーキ（バターと砂糖でソテーしたバナナとパイナップルが入ったクレープ状のパンケーキ）、フルーツ（バナナ、パイナップル、パパイヤにライムを絞る）、ゆで卵、薄いカリカリトーストにバターと手作りのパイナップルジャム。フルーツ以外のメニューは毎日替わるそうだ。朝食の席で、8月下旬からずっとウブドゥに来ているという大阪の女性と話をする。以前、1年半ほどバリで働いていたこともあったという彼女はインドネシア語がペラペラで、宿の人とも流暢に話をしている。キーボー、メグミが最後に起きだして、全員の朝食が終わる頃、ウブドゥで居酒屋「影武者」をやっている日本人の伊藤さんが様子を見にきてくれた。山本寛斎に似た感じの伊藤さんは、ウブドゥの純情青年とそれをもてあそぶ日本人女性の話や、ウブドゥならではの霊的な体験のことなど、短い時間に面白そうな話を聞かせてくれた。ここではどんな生き方をしても自由だし、誰にも何も言われないのが魅力だという言葉が印象的だった。今夜は近くの火葬場！でお祭りがあり、チャロナランという珍しいダンスが見られるということで、ぜひ出かけては、とお誘いを受けた。9時半頃、夕べ空港まで出迎えに来てくれていたのに会えなかったアブちゃんが私たちを訪ねてくれた。彼は私の弟の友達で、こちらで一度会おうと日本で連絡をしていたコモド島出身の男性。もちろん私も初対面だ。空港から遠いウブドゥに泊まる私たちのことを心配して、空港まで迎えにきてくれていたのに、それを知らなかった私たちはSehatiの車に乗ってしまったというわけだ。昨夜の非礼を詫びると、彼は快く許してくれた。クリクリッとした目がキュートなアブちゃんは日本語がカンペキ。彼はデンパサールの国営ホテル「プルタミナ・コテージ」でセキュリティを勤める国家公務員で、高校卒業後コモドを出てバリの大学に進んだという。親切なアブちゃんは、あさってから3日間も私たちにつきあってくれることになった。「アブちゃん、そんなに仕事休んで大丈夫？」「ダイジョウブ。アブちゃんオナカイタイっていうから」と彼。「日本の会社とバリの会社違うカラネ。アブちゃん人気あるし」日本語も英語も話せる彼は、勤務先でも顔がきくらしい。「インドネシア語もバリ語も話せるしね」という彼の言葉にみんな笑ってしまっ

●左端が著者

たが、同じインドネシアとはいえ、このふたつが話せるというのは、九州男児が大阪弁も標準語も話せると自慢するのとは格が違うらしいのだ。2時まで時間があるというアブちゃんは、私たちを自分の車でモンキーフォレストへ連れて行ってくれた。ここは野生のサルがたくさんいる森で、入り口で買ったピーナッツをねだってサルたちが集まってくる。ピーナッツを持った手を伸ばすとそっとそれを受け取るお利口さんもいれば、後ろ手に隠した袋を奪っていくワルもいる。メグミはサルに気に入られたらしく、ズボンを思い切りひっぱられていた。奥にあるお寺のまわりには、生まれたばかりの小さなサルがチョロチョロ。ほんとに愛らしい。記念撮影の時、一匹のサルがいきなりタカシの肩に乗ってしまい、タカシは固まったままカメラに収まった。たくさんある両替商のなかからこの日一番レートのいい店（19.60Rp）で両替してから、蓮の池のある「ロータス・カフェ」の中庭でティータイム。ここでアブちゃんの物語りが始まった。彼は2年ほど前、ひとりの日本人女性とつきあっていた。彼女はバリで仕入れた小物を日本に送り、世田谷の店で売る商売をしていた。外国人が国外に持ち出せる荷物の量には制限があるが、インドネシア人であるアブちゃんが手伝えばたくさんの商品を国外に送れる。アブちゃんは彼女の仕事を助け、彼女の仕事は成功した。彼女はアブちゃんの名義でバリに土地を買い、二人は結婚を考えた。しかし、しばらく彼女がバリを離れているうちに行き違いがあり、彼女は友人からアブちゃんが他の人と結婚してしまったという噂を耳にする。怒った彼女は、クタの街中でアブちゃんの頬を思い切りひっぱたたいた。その後彼女はジャワの男性とつきあい始める。彼女のことをまだ愛していたアブちゃんは、バリに来ていたそのジャワ人をホテルに訪ね、彼のお腹をナイフで刺した。「彼女と真面目に結婚する気があるなら今すぐ君を病院に連れていくがどうなんだ」と詰め寄る彼は、頷くジャワ人を病院へ運び、その後警察へ出頭し、3ヵ月刑務所に服役した。「彼女とはキスもしてなかったヨ。結婚まで手も握らない。これ、コモドのカスタムね」とアブちゃんは語る。今、その日本人女性とジャワの男性は結婚し、子供もいるという。そしてアブちゃんとは家族ぐるみで友達づきあいをしているそうだ。ジャワに移り住んだ彼女はバリの土地を処分し、そのお金の半分をアブちゃんに渡した。アブちゃんはそのお金で車を手に入れたのだそうだ。「男気」とでもいうのだろうか、ひょうきんなアブちゃんからは想像できないような命がけのラブストーリーに、聞き入っていたみんなも黙ってしまった。あさっての朝会うことを約束してアブちゃんと別れた私たちは、ランチを食べに「トロピカーナ」へ。初めてのインドネシア料理に挑戦だ。ナシゴレン、サテアヤム、ガドガドなど､みんなおいしくてビールも進む。お腹いっぱい食べて一人350円くらいという安さにびっくりして宿に戻った。部屋に帰って夕方までトランプ&ヤッチー大会。その後は夕食を食べにナイトマー



●人物紹介／左上：タッちゃん . 中上：タカシ . 右上：キーボー
左下：メグミ . 右下：カズ

ケットへ。テーブルを並べたテントで、メニューから好きなものをピックアップしオーダー票に書き込む。ミゴレン、ヌードル、ナシゴレンなどをビンタンビールと一緒に頬張っていると、屋台のオニーチャンたちがあやしい日本語と英語で話しかけてくる。日本人はあまりいなくて、ほとんどがオージーのようだ。喧騒とエネルギッシュな雰囲気がすごい。Sehatiに帰ると、イクちゃん（本名はイ・クツッツさんなのだが私たちは勝手にこう呼び最後までイクちゃんで通してしまった）がココナッツウイスキー、アラックを用意して待っていてくれた。テラスでイクちゃん、マディちゃんを交えて酒盛り。ドブロクのようなアラックに、黒米と白米の2種類のライスワインを入れて飲むのだが、これがかなりいい口当たり。テイクアウトしたサテと、イクちゃんが準備してくれたマルタバ（タイ焼きのような甘いクレープ）をつまみにグビグビやったが、アラックが悪魔の酒だと知ったのはかなりあとになってからだった。11時頃、チャロナランを見に出かけた。すごい人だかりで、一体何が行われているのかわからない。しばらくそのまま立っていると、見物人の人垣がサッと崩れた。殺気にも似たエネルギーだけが伝わってくる。場所を変えて見直そうと移動した途端、イベントはあっけなく終わってしまった。偶然会えた伊藤さんによれば、雨のためにダンスが予定より早く始まってしまったのだそうだ。この日、トランス状態になった踊り手がナマのヒヨコを食べ、ランダはトランスのままお寺に運ばれたそう。貴重な場面を見逃した私たちはがっかりしたが、今日は帰るしかない。と思ったとき、タカシの姿が見えない！人垣のなかを捜したがどこにもいない。とりあえず女性陣は宿へ帰ることにした。この帰り道がまた大変。タッちゃんがモテモテで、やたらと地元の男の子に声をかけられてしまうのだ。なかにはかなりしつこいヤツもいて、私とカズで、はさむようにして歩いた。いったん宿へ帰り、イクちゃんとキーボーが自転車でタカシを捜しにいく。しばらくして二人に連れ帰られてきたタカシによれば、お寺のそばで立ち小便をしているうちにみんなの姿を見失い、かなり酔っ払っていたせいもあってまったく道がわからなくなってしまったそう。イクちゃんとキーボーの姿を見たときは半べそ状態だったとか。アラックの飲みすぎなんだよ、まったく！それなのに部屋でさらにアラックを飲み、私たちの部屋でトランプ。でもみんな眠くて集中できない。1時過ぎに解散。長〜いウブドゥの一日がやっと終わった。

［後日談］タカシが地元の人と一緒にオシッコをしたのは「死者の寺」といわれる所で、普段は夜になると誰も近寄らない場所だそうだ。ユーレイもいっぱい出でるとか…。タカシ、隣にいたのはホントに人間だった？

■10月4日（月）

雨の音で目が覚めた。今は雨期の始まりだそうだが、この雨は夕べからずっと降り続いているらしい。8時半朝食。バナナジュースと一緒にお湯を頼み、日本から持ってきたインスタント味噌汁を飲む。昨日飲みすぎた胃にはやっぱりこれだね。青い顔をして一番最後に起きてきたタカシもこれだけは入るようだ。彼は夕べカエルのお化けが出てきた悪夢に悩まされたとかで調子が悪そう。単なる飲みすぎだと思うけど。今日のメニューはフレンチトースト、ハムが入ったしょっぱい薄焼き卵とフレンチフライ。飲みすぎなかった私は全部平らげてしまう。時々薄日がさすものの、雨はやみそうにない。今日はどうしようかとテラスでウダウダしていると、マディちゃんがお掃除に来てくれた。「地球の歩き方」に載っているSehatiのページを見せると、声を出して読んでみてくれと言う。ここのスタッフはみんな勉強熱心で、日本語を覚えたがっているようだ。文字面を指で追いながらゆっくり読むと、マディちゃんは納得してお礼を言ってくれた。かわりに彼からインドネシア料理について教えてもらった。雨が激しくなってきた。ハイビスカスやバナナの葉っぱに細い糸のような雨が降り注ぐ。どこからか竹のティンクリックの音やニワトリの声が聞こえてくる。ウブドゥは、景色も音も、とても立体的で密度が濃い。午前中はずっと雨。テラスでカズと二人でヤッチーをした後、私は日本の友達に葉書を書く。カズは読書。他の4人は部屋で朝寝をしているようだ。

雨のやみ間をみて二人で郵便局まで葉書を出しに行く。日本までの郵便料金は葉書一枚700Rp。ご飯粒で作った糊でクプクプのイラストが書かれた切手を貼り、窓口に出しておしまい。女性たちが足踏みミシンをカタカタと踏む、手作りのバティック屋さんをひやかして宿に戻った。1時を過ぎても誰も起きてこない。私とカズはメインストリートを再び散歩。雨が上がり、強烈な太陽が顔を出してきた。かなりの暑さだ。ツーリストインフォメーションを過ぎたところにこぎれいなマーケットを見つけて、冷えたビンタンを買い込む。夕ベナイトマーケットが開かれていた場所の隣は、色々な店が集まったパサールで、野菜、果物、日用品などを売っている。ここでサテを買い、近くでパンも仕入れて持ち帰ることにした。この辺りはウブドゥの中心地らしく、とてもにぎやかだ。ベモの運転手がしきりに「タクシー？」と聞いてきたり、土産物屋のオジサンに呼び止められたり。バックパッカーの姿もたくさん見える。宿に戻り、キーボーとメグミが買ってきたナシチャンプルも加えてテラスのテーブルに広げ、全員で昼食。その後は6人でヤッチー。私は途中で抜けて洗濯をする。テラスの柱に洗濯ロープを掛けると、何だかこの部屋が我が家のように思えてくる。空がまたまた曇ってきた。晴れたらプールにいく予定をキャンセルしてみんな思い思いに過ごす。フロントに置いてあるティンクリックを習ったり、男子はバレーボールをしたり、屋台でヌードルを買ってみたり……。7時頃、シャワーを浴びて夕食を食べに「影武者」へ。お祭りの提灯や土蔵が日本の田舎家のようだ。まわりにはたんぼが広がっている。囲炉裏のあるテーブルに陣取って、カツカレー丼やネギマ、お浸し、ざるそばなど、日本の味を楽しんだ。オーナーの伊藤さんの奥さん、ユミさんがここの裏でクバヤのお店「Kebaya-ya」を開いている。クバヤは、サロンの上に着る長袖のブラウスで、これにサロンと帯を合わせて正装すれば、オダラン（寺院のお祭り）にも参加できるそうだ。店内にはきれいな色のレース生地が並べられている。女性の本性むきだしで迷いに迷い、色々鏡に当ててみた。結局、メグミは赤に近い濃いピンク、タッちゃんは濃いブルー、私は茶系のオレンジに決めて、ユミさんに採寸してもらった。生地と仕立て代込みで4万Rp。オーダーで洋服を作るなんて日本ではできない贅沢だ。ユミさんのお店にはネコが11匹もいて、産まれたばかりの子ネコがやんちゃにかけ回っている。日本の獣医さんのところに預けてきたポコリンのことを思い出してしまった。イクちゃんが迎えにきてくれてまたまたアラックで酒盛り。部屋に戻り、横山組と1回だけヤッチーをしてお休みなさい。

■ 10月5日（火）

8時朝食。今日のメニューはパイナップルとバナナが入ったトーストサンド、フレンチフライ、それにテ。タカシは今日は調子が良さそうだ。9時過ぎにアブちゃんが約束どおり迎えにきてくれる。今日は朝から晴れていて、ダイビングにはもってこいのお天気。海の支度をして、アブちゃんの車でヌサドゥアに向けて出発だ。「アブちゃん運転ウマイ」と自慢していた彼のドライビングはまるでジェットコースター。3重追い抜きも当たり前で、犬やニワトリを蹴散らすように進んでいく。助手席にいると寿命が縮まりそうだ。レンタカーを借りて運転したいと言うキーボーに「危ないからやめたほうがイイ」と言っていた理由がわかるような気がする。ヌサドゥアを過ぎ、ベノアビーチへ到着。白い砂浜とマリンブルーの海を見て初めて南の島に来たという実感がわく。ここにはマリンスポーツのデスクがあって、カズのことをしきりに「シャチョーサン！」と呼ぶヘンなオジサンがあれしろこれしろと誘う。結局キーボーとタカシは、着いて早々ジェットスキーにトライ。続いて二人はパラセイルもやっている。「みんなでやればディスカウント」という言葉と、アブちゃんの友達で、妙に日本語のうまいダイビングのインストラクター、アリちゃんの勧めで、高所恐怖症の私もパラセイリングをするハメになってしまった。ジャケットを着け、二股の足かけをはかされて、簡単な説明の後すぐに浮上。ボートに引っ張られているだけでラクチンだしなかなかいい眺めだ。でも上空は割と風が強くて体が持っていかれるような感じ。降りるときには右手でバーを思い切り引いてフ

ワリと着地。恐くはないが、一度やればいいかな。次はいよいよ本命のダイビングだ。タカシとカズ、私の３人でオフィスへ行き、レンタル器材を仕込んでインストラクターと一緒に出発。モーターボートで15分くらいのポイント「タンジュングディ」に潜った。透明度はそれほど良くない。７メートルくらいだろうか。流れがかなりあり、水温も低そうだ。でも、ソフトコーラルやテーブルサンゴがたくさんあり、海亀さんにも出会えた。ただ40分も潜っていると寒くて参った。5ミリのウエットスーツを着ていたタカシは大丈夫だったそうだが、薄いオペロンのスーツで潜った私たちは途中からブルブル。ビーチに上がり、太陽に肌をさらしても、体の芯が冷えてしまっているのがわかる。ダイビングをしない３人はおいしそうにビールを飲んでいるが、２本目のダイブを控えている私たちは、ミゴレンとミネラルウォーターで軽くお腹を満たしてから次のポイントへ。今度は短い潜水時間にしてくれるようインストラに頼んでおいて海のなかへ飛び込んだ。今度のポイントは比較的浅場だったので、海中の様子がよくわかる。魚影もなかなか濃い。ボートに上がり、今のポイント名をインストラに聞くと「ワカラナイ」との返事。いいですねぇ、この大らかさ。日本や日本人のインストラがいる海外リゾートだと、船の上で「ハイ、次のポイントはどこどこで水深は何メートルで…」と丁寧なブリーフィングがあるが、ここではそんなもの一切なしだ。でも、何の問題もない。「人はログブック記入のためのみに潜るにあらず」だ。バリで、というかベノアビーチでダイビングして感じたことは、この島はあまりダイビング向きではないのではないかということ。確かに伊豆の大瀬崎に比べれば、トロピカルな魚はいっぱいいるし、サンゴも美しい。でも、魅力的なポイントをもつ南の島はほかにも無数にある。あったかい海に潜りたいなら、お手軽なグアムやサイパンで充分だろう。ただしそれは、マリンスポーツだけを楽しみたいなら、という限定条件つきでのことだが。ダイビングを終えてビーチに戻ると、他の３人とアブちゃんもシュノーケリングから帰ったところだった。収穫したシャコ貝やサンゴがテーブルに置かれている。器材を洗い、シャワーを浴びて今日初めてのビールを飲む。ウマイ！アブちゃんがとってきたシャコ貝をツボヤキ風に料理してくれた。こわごわ食べてみたがなかなかの美味だ。ひと息ついたところでベノアビーチとお別れ。アブちゃんが夕日のきれいな場所に連れていってくれるというのだ。30分くらい田舎道を走ってウルワトゥに到着。海を望む崖の上から沈みかけた夕日を撮影し、ウルワトゥ寺院へ急ぐ。入り口で緑のサロンを借りて（500Rp）夕日が沈むのに間に合うよう急いで石段を駆け登った。息を切らして頂上まで到着すると、ちょうど雲に隠れた夕日が海を染めて沈みかけていた。ここにも野生のサルがいて、観光客からピーナッツをねだっている。夕焼けが空を染めるまで、ガラムを吸い、崖の下に広がる海を見ながら時を過ごす。聞こえるのは波の音だけだ。やがて西の空が真っ赤に色づくと、みんなの姿が夕焼けをバックのシルエットになっていった。クタまで戻って夕食。チャイニーズ風のシーフードレストラン「Dewi Sri」で、水槽からロブスター（1キロ2000円）を７尾選び、スープやソテーにしてもらう。ナシチャンプルや他の料理、ビンタンもとって満腹になった（11万７千Rp）。宿まで送ってくれたアブちゃんと明日の８時に会う約束をしてさよなら。部屋に戻り、ダイビングスーツと自分の体をシャワーしてお休みなさい。今日はとってもアクティブな一日だったね。と、ここまで書いて眠るつもりが、私がシャワーを浴びている間にタカシとカズがビールを買い出しに出かけていた。それでも足りない二人は、眠っていたらしいマディちゃんを起こしてビールをリクエスト。マディちゃん、タッちゃんを入れた５人で、２階のテラスでまたまた酒盛りが始まってしまった。

ヤレヤレ……。

＜つづく＞

●サルに乗られて固まるタカシ…

UBUD よろず百科

バンヤン樹
BINGIN

チャンプアンホテル前

何年か前にチャンプアンにあるPr GUNUNG LEBAHのオダランに出掛けた時のことである。入り口にある大きな樹がまるで生き物のように感じて驚いた記憶がある。Pr GUNUNG LEBAHに行くにはチャンプアン川の深い谷にかかる小さな橋を渡らなくてはならない。この橋を渡る時、何ともいえない霊気のようなものを感じた。その手前に高くそびえる樹が欝蒼とし太陽の日差しをさえぎり、また月明かりをさえぎっている。光を失った暗い空間はいっそう霊気を感じさせるに充分な演出効果がある。

この樹の名称をBINGIN（バリ名）という。（インドネシア名・BERINGIN。英語名・BANYAN）インド原産のクワ科の常緑樹。別名ベンガル菩提樹、バンヤン樹。樹高30mに達し、樹幹は太く生長力が強い。横に伸びた枝から多くの気根を出し、これが地上に達すると幹のようになるため、一本の木が林のように見える。大きなものは樹幹部の直径130mにも達する。（「南アジアを知る事典」平凡社参照）

BINGINがいつからBALIに生息したかはわからない。BINGINがあるところには必ずといっていいほどPuraやPuri（王宮）があったりする。BINGINがあるからそこにPuraやPuriを建てたのか。それともPuraやPuriが建てられてからBINGINが植えられたのかわからない。PuraにあるBINGINには必ずほこらがあり、これは樹霊信仰があることをあらわしている。今でもバリの人々はこの樹の下で瞑想を楽しんだとも伝えられている。Puriの前にあるBINGINには必ずクルクル（丸太をくり抜き、木の棒でコンコンとうち鳴らすことによって、村人に情報を伝達する道具）がある。なぜかという理由はまた次の機会に調べることにする。

UBUDにもいく本かのBINGINがある。今回はそれを調べてみた。それらのすべてがランドマーク（土地の目印となるような建造物）としての役割をはたしている。村が今ほど賑やかでなかったころBINGINはどこからでも見つけることができるものであった。そしてそれは村の中心を示したり、またPuraの位置を教えていたようである。生命力のあるこの樹からとれる樹液は今でもバリの人々に生薬として使われている。またBALIANが呪薬として使っているとも聞く。

こんな話もある。BINGINにはLUBAK（＝バリ語。インドネシア語＝MUSANG／いたち・やまねこ）のような動物が住んでいて、夜な夜な樹から降りてきては鶏を食べてしまうそうだ。顔は狼、体は猫、尻尾は長く、足は犬のようで、しかし足は3本という奇っ怪な動物だという。こんな動物に興味のある方はBINGINの樹の下で一夜を明かしてみてはいかがだろう。なんにせよ、この存在感のある不思議な樹は、初めてバリを訪れた者にとっては畏敬の念を抱かせる。この樹に宿る精霊は、おそらく何百年も、その地の人々の生活や時の移り変わりを観てきたにちがいない。そして、これからのバリが、どんなふうに変化していくのかも黙って見守り続けるのだ。

Pr.Dalem
Desa Adat Ubud

Puri Saren 前

G

B

H

Pr.Dalem Puri

C

Padang Tegal
Pr. Penataran
Kelocing

E

Peliatan
Pr.Agung 前

D

Monkey Forest
Pr. Dalem Agung
Desa Adat Padang
Tegal

F

Pengosekan

クタのココナッツツリー

ウブドフリークの皆さま、はじめまして。私はヌサドゥアにすみ、毎日クタに通っているＰちゃんこと、玉川純子と申します。なぜにＰちゃんかというと、…う〜ん、自己紹介でページが一杯になりそうなのでとにかくＰちゃんで以後お見知り置き頂きたいと思います。私のページはウブドフリークの読者の皆さまに、あの人種のるつぼ、クタの情報をすこしずつ伝えてゆく予定となっております。名付けて「Ｐちゃんのクタでクタクタ！」なんて題名はいかがでしょうか。初回からハイテンションで飛ばしているＰちゃんですが、さっそく本題に参りましょう。クタを御存知ない方はもはやいらっしゃらないとは思いますが、一応説明致しますと、エアポートから北に4Km位の所にあるバリで一番にぎやかなインターナショナルタウン、それがクタです。ちなみに私の住んでいるヌサドゥアはエアポートから南に10Km位の高台地、ヒルトン、インペリアル、ヌサドゥアビーチなどの高級ホテル群が建ち並ぶことで有名なポイントです。といっても私の住んでいる村は同じヌサドゥアでも、英語のできない人々がたくさん住んでいて、牛はモーモー、にわとりはギャーギャー鳴いているローカルオンリーの場所なので高級ホテルには程遠いのですが…。あ〜、またまたクタから話が外れてしまいました。今回私がテーマとするクタクタ話は「ココナッツツリー」つまり椰子の木についてです。それもクタのココナッツツリーに限って話を進めます。クタで背の高いココナッツツリーを持っている人ははっきり言ってお金持ちです。私にとってはお金以上に貴重な物を持っている人々でもあります。クタはあの通り、開発に開発を重ね、私の大好きなココナッツツリーは、無残にもどんどん伐採されてゆく中で、ココナッツツリーの生えているような広いスペースを他人にも売り渡さず、ホテルも作らず、それでも余裕で生活してゆける人々は逆に「この辺でココナッツツリーをたくさん持っているのはうちだけだよ。」と自慢なさったりします。他の村ではごくあたりまえに生えているココナッツツリーもクタに限っては、贅沢の象徴となりつつあるこの頃です。あの高〜い高〜い背丈になるまで、10年以上はかかるそうで、それを考えれば、ココナッツツリーはいくらお金をかけようが何をしようが10年黙って待ち続けないと手に入らない代物なんですねぇ。

私が思うに、将来きっと「うちのリビングの床は大理石のタイルでできているのよっ！」と自慢する奥様よりも「うちの庭にはこの辺で一番背の高い椰子の木がバニャバニャございますのよ。」とさりげなく話す奥様の方が、お金持ち度は圧倒的に高くなるのではないかとあくまで個人的に予想するのであります。

最近、クタのJL.カルティカプラザにできた「ウォーターボン」という大きなプールを皆さま御存知ですか？ここはちょうど日本の御殿場ファミリーランドとワイルドブルーヨコハマをたして2で割ったような、大きなすべり台や流れるプールやプールバーなどといった、プールの遊びならなんでもまかせて！風の日本に負けず劣らず施設の整った所ですが、日本のプールがどう逆立ちしてもかなわないのが、やっぱりこの豊かに風に舞う、生のココナッツツリーだと思うんですね。年代物のワインをたくさん揃えてあるレストランのように、天高くそびえるココナッツツリーがあるのとないのでは（ちょっと大げさかな〜とも思いますが）プールの格が違ってくるってもんです。という訳で私はウォーターボンで小学生の様におおはしゃぎしながらすべり台をすべりまくったり、流れるプールで昼寝をするのが大好きです。ちょっと値段が高いのが、残念なのですが…。

そんなこんなで、今日はココナッツツリーをとりあげてみましたが、皆さまが次回バリにいらした際にはぜひ、風になびくココナッツツリーを見ながら、「10年ひとむかし…。あの頃は若かった…。」と他人には訳のわからない郷愁にひたってみてはいかがでしょうか？

それでは次回、投稿のお許しが出る日まで「Ｐちゃんのクタでクタクタ」を楽しみに待っていてくださいね。

とっておきの瞬間

T.Y.

幹線道路をバイクで走っていると、ときどき金ぴかの塔を荷台に載せて運んでいるトラックと、それについていくたくさんの乗用車やミニバスの団体に出くわすことがある。バイクだから抜いていくことはできるが、この集団を見ると、ついついそのトラックの後ろのスペースに滑り込んで、しばらくこの塔を見て、感慨にふけりたくなる。最後に、いろんなウパチャラの最後に、海に行くんだ。死んだら最後の最後に海に行くんだ、とおもうと、バリ人がウパチャラというかたちで織り成している世界と言うものが、今更ながら美しいものだと感じられて、背中がジーンとしてくるときもある。

亡くなった人の霊を、小さな椰子の実でできたシンボルに込めて、これといろんな供物を載せて、遺族たちは海に向かう。ウブド周辺でも、火葬のあとの灰はサヌールの海岸に流しに行く。あのバリ・ビーチ・ホテルのわきにあるサヌールの海岸は、昼は観光客の遊ぶ場所で、夜はバリ人が死者の灰を流しにくる儀礼の場である。だけど火葬のときは海に行かないで、川に灰を流しに行く場合もある。とくにあまりお金がないと、近くの川に流して済ませるみたいである。

しかし、火葬のあとでもう一度行う火葬（ニェカーあるいはガスティーという）のときは、クルンクンの方の海に行く。しかもこのときは真っ昼間である。一度、パダン・トゥガルの人達と一緒に、これについていった（連れていってもらった）ことがある。波立つ真っ青な海を背景にして、金箔の塔が海よりやや薄い青の空に向かってそびえたつ。集まった人々は白と黄の正装を着ている。おばさんが、浜風に打たれて髪

photo: E. Sugawara

をくちゃくちゃにしながら、供物や死者のシンボルにきよめの水をふって歩く。祈りの言葉を唱えるお坊さんの声は、波の音にかき消されて聞こえない。鐘の音だけがはっきりとしている。しばらくして皆が祈ったあと、供物や、死者の灰を入れたシンボルを海に流す。塔も男たちが運んでいって海に投げ入れる。すべてを海に流す。すべてがただ美しい。全身濡らしてこの仕事をおえたバリ人の姿は、何故か背景の２色の青に、この波の音に、この風の音に、よくあっている。この感覚は忘れられない。

死んだ人の霊は、こうして海に帰っていく。最後の帰っていく場所として海を、最後のウパチャラとしてこんなきれいな光景を、とっておいたバリ人は、贅沢な人達だと思う。そしてこういう、ふつうなかなか味わえない体験をさせてくれたパダン・トゥガルの人達に、心から感謝したいとおもう。遅ればせながら。

ENAK・ENAK・UBUD

おいしいものに目がない Part 5

バリジンノ ココロノトモ Sambal

「あなた〜から　くるし〜みを　うばえた　そ〜のときぃ〜」と唄っているのは、御存知、五輪真弓嬢であります。タイトルは「心の友」。日本で聞いたこともないこの唄が、なぜかインドネシアで超ウルトラ・スップル（Superをバリ人が発音するとこうなる）大ヒットしたのが数年前。
「オシン」「アジノモト」「ココロノトモ」、この3つの単語をバリに来たことがあるあなただったら、必ず一度は耳にしているはず。バリの田舎に行けば行くほど、この3つの単語でしか、ニホンジンに声をかけられないバリ人はたくさんいます。はい。
「オシン」、「アジノモト」は、まぁ私達にもわかるけど、いきなり「ココロノトモ〜！！」と叫ばれてキョトンとしているニホンジンがたくさんいて、妙におかしくなるのです。
あ、ちなみに「オシン」も。以前インドネシア全国で大ヒットしたTVドラマです。

さて、余談はこのくらいにして、今回のENAK ENAK UBUDは、グ〜ンとベーシックにSambal（サンバル）特集でいってみましょう。Vol.1のナシ・チャンプールでもSambalには少しふれましたが、ここでうんと掘り下げてみようと思います。一言でいうと、ただのチリ・ソースなのですが、これがけっこう奥が深いんですよ。
最近、いろんなメーカーのSambalが市販されていて、スップル・マルケッ（Super Market）にゴロゴロ並んでいるのでおみやげに買っていく人も多いと思います。どのメーカーも原料、味とともに似たりよったりで、それなりに日本でお楽しみいただけるモノになっています。いやしかし、ホントーのSambalは、やっぱし手作りでっせ。
バワン・メラと呼ばれる小ツブの赤タマネギ、にんにく、とうがらし、トマト、塩を、石のすりばちでゴリゴリつぶせば、はい、添加物いっさいなしの、ごはんとおかずの友です。これが基本のSambal。もうちょっとうまみがほしい時は、トゥラシを加えます。トゥラシ…。小えびに塩をまぜ、つぶして発酵させた調味料。広く東南アジアの各地で使われているうまみ調味料で、科学分析をしてみると、日本の味噌と比べてアミノ酸が2倍、旨味に関係するグルタミン酸の含有量も2倍あり、ほんの小量でおいしいダシになります。
このトゥラシ、生のまま塊で売られているのですが、「くさや」に似た臭いがきつく、「え〜っ？こ、これがおいしいダシ？」と思ってしまいます。エナちゃんもいつも胸をムカムカさせながら使うのですが、不思議なことにフォークにさして火であぶったり、油で炒めたりして火を通すと悪臭が消えてなんともいえない香ばしい臭いになるのです。もちろん、生のまま使う人はいません。エナちゃんの好物で、Sambal Kukusというのがあります。これはスライスしたSambalの材料にトゥラシを多めに加え、小さな容器に入れてガーッと蒸すのです。これがナシ・セロという、こまかくサイコロに切ったサツマイモを混ぜて炊いたごはんと相性バツグンで、ホント天然ヘルシー度100%。
ここで笑える話があります。Baliに初めて来たH子さん、ナシ・ゴレンにのっかってきたクルプックせんべいが気に入り、さっそく雑貨屋で探しました。揚げる前は、小さくて、エビが入っていて…という話を友人から聞き、「あっ、コレコレ！」と海老の絵のついた小さなパッケージを大量に買い込んだのですが、これが包みを開けてみると、茶色の塊のくさいモノだった…。んで、エナちゃんに「これ、どうやったらクルプックになるの？」と助けを求めにきたのですが、なんとそれはトゥラシだったのですねぇ。みなさんも気をつけましょう。

さて、次は油で調理するSambal Goreng。基本

●市場に売っている、バワンメラやとうがらし。

のSambalをただ多めの油で炒めただけでもいいのですが、クニッ（ターメリック）や粒胡椒・長胡椒、その他、お好みの香辛料・調味料（ケチャップマニスなど）を加えてもいろいろバリエーションが楽しめます。バリの女のコでもホントに料理上手なコがつくるSambalは、深〜い味わいが絶妙な、思わずうなってしまうほどのものです。サヌールのバイパスぞいにあるシーフード専門ワルンでは、完熟トマトを丸ごと油であげたものをたっぷりと使っていましたが、これまたすばらしいSambalでした。Sambal Gorengはどんな素材にもぴったりのソースです。ただ素揚げにしたテンペ、タフ、鶏肉、魚、そして茹で卵や、きゅうりなんかの生野菜、ナスを丸ごと蒸したの、海老やいかのソテー、ソーセージ、もうなんでもおいしくなっちゃう。充分主張の強い味なのに、なぜか素材のおいしさを殺さない。こりゃあ、たかがSambalとあなどれません。

そしてもうひとつ、おすすめのSambal Mentah。生のバワンメラ、にんにく、とうがらしをスライスするだけの超カンタン、超美味のSambalです。このサンバル・ムンタを応用したSambal Mentah Ayamをつくってみましょう。

【材料】・鶏肉（骨なし、胸肉もしくはモモ肉）
　２カタマリ（200g〜300g）
・バワンメラ　５〜６ツブ（なければ玉葱 半コ）
・にんにく　３〜５ツブ
・生のとうがらし　３〜５ツブ
・サラダオイル　50cc
・塩　だいたい小サジ２杯（お好みで）
★バワンメラ、にんにく、とうがらしは、お好みで大量に入れてもOK

【1】 バワンメラ、にんにく、とうがらしをひたすら薄くスライスする。バワンメラのかわりにタマネギを使う時は、超うすぎりにスライスした後、冷水にしばらくさらしてから、よ〜く水気をしぼります。
【2】 鶏肉を、大きいまま素揚げにします。はじめ強火、その後弱火、最後にまた強火にして皮がカリカリになるまで、これでもか…と、揚げます。カラッと揚げるのがコツです。少し冷めるのを待って手で細かく肉をさきます。
【3】 ボウルに1と2、そしてサラダオイルと塩を入れ、よ〜く混ぜて出来上がり。

ここで、ハッと思い出したのですが、こういう料理に使う塩、シンプルな料理だけに、できれば天然の塩を使うのが、おいしくつくるコツだと思います。まちがっても日本の食卓塩など使ってはなりませぬ。バリに来たらあなたもぜったいバリの塩を買って帰ってください。パサールで一袋1Kg 800ルピア。おにぎりにしようものならもう、あまりのおいしさに泣いてしまいます。話がそれましたが、先程のSambal Mentah Ayam、食べる時は、白いごはんに少しだけのせて、手で食べてみてください。ねっ?! すごくおいしいでしょ？もし、お酒のおつまみで食べる時は、サンバルと塩を少なめに加減するといいかもしれません。
ホント、これはとりあえずバリ人にとっては誰もが好きなおかずのひとつです。以前日本公演中のあるガムランのグループの有名な踊り手A氏は、知り合いの家でこのSambal Mentah Ayamをつくってもらって狂喜し、ごはんをどんぶり3杯食べたそうです。

…というわけで、Sambalいろいろ、これはバリ人、いえ、インドネシアの人々にとってまさに心の友、なくてはならない食卓の友。
そしてエナちゃんにとっては、食べれば食べるほど、深い味わいがクセになってますます好きになってしまう不思議な友なのです。

ENAK ENAK ENAK
ENAK ENAK ENAK

Pelajaran 4

バリ島・星空散歩道

流れ星は、「下から上」へ流れる・・・・・・・？

バリ天文教育センター主任講師：青木　満

（『極楽通信 UBUD』毎度の遅配を見越して）“Selemat Tahun Baru!”（あけまして、おめでとうございます。）本年も、『バリ島・星空散歩道』をご愛読いただけますよう、よろしくお願い申し上げます。

さて今回は、万々が一、本号が年内に発行された場合も考慮して、この年末年始にかけての天界のハイライトを、“歳末大バーゲン”でご案内いたしましょう。

1. 12/30　白昼の木星食（九州以北で観測可）

いよいよ年も押し迫った12月30日の朝9時過ぎ、月が木星を隠すという「木星食」が、今年最後の天文現象として起こる。それにしても、木星にとってのこの1年は、シューメーカー・レビー第9彗星の“連続パンチ”を喰らったり、月に隠されたりと、とんだ“当り年”になってしまったようである。

ところで月が木星など、他の天体を隠すとは、いったい、どういうことなのだろう。

皆さんご存じの通り、月は地球のまわりをおよそ27日余りでまわっている衛星である。そのため、我々が地球から月をながめると、毎晩少しずつ満ち欠けしながら、同時刻に見える位置が1日当たり約13°ほど、背景の星空のなかを西から東へと移動しているように見えることになる。

その移動していく途中で、ときどき月の通り道（白道）上にある背景の星と月、そして地球上のある地点とが一直線に並ぶことがある。そうなると、その地点から背景の星を見ようとしても、月の裏側に隠されてしまっているために、月が少しずつ移動していって、月の反対側の縁から背景の星が出てくるまで、ながめようにもながめられないことになる。

このような現象を“星食（せいしょく）”または“掩蔽（えんぺい）”といい、なかでも地球の兄弟星・惑星が隠されることを“惑星食”または、その隠される星の名をとって（今回の場合には「木星食」）呼ばれることになる。つまり早い話が、月が太陽（お日さま）を隠す“日食”と、呼び方も原理も、まったく同じわけである。

ただし注意しなければならないことは、日食同様、背景の星―月―地球と一直線に並んだからといって、地球上のあらゆる地域で星食が見られるわけではないことである。当たり前のことではあるが、昼夜の別とは関わりなく（月齢によっては、日中でも肉眼で何の苦もなく月をながめられることを、皆さんも経験されているであろうし、望遠鏡を使えば、ある程度の明るい星は十分に確認できるため、昼夜の別は条件にはならない）、まずは肝心なお月さまが地平線より上に昇っていなければならない。だから、地球の半ベタはその資格を失ってしまう。

次に、いくら地平線より上に月が存在している地域（残りの地球半分の地域）でも、そのすべての地域で星食が楽しめるのかというと、そうではないところがややっこしい。

月は地球から平均384,400km（地球の直径の約30倍）という、我々の日常感覚で考えるとケタはずれに遠く離れた宇宙空間をまわっているが、天文学的単位で考えると、こんなのは“目と鼻”ほどの距離にもならないのである。このように極めて近い距離にある天体をながめた場合、背景の星空に対しての月の見える位置が、ながめる地点の違いによって、

わずかながら異なってくるのである。

たとえると、いま、あなたは見事なライス・テラスを横切る畦道に立っているとする。道をはさんだ20～30mほど先に、まっすぐ天までとどくかと思われるようなヤシの木が1本立っていて、その遥かむこうにバリ最高峰のアグン山がくっきりと見えているというシチュエーションを想像してもらいたい。

この状態から、手前のヤシの木と背景のアグン山とをながめながら横に1歩、2歩、3歩と、少しずつ歩いていくと、さて、どのように見えるだろう？

歩みを進めるにしたがって、手前に見えるヤシの木の位置は、歩く方向とは逆方向に、どんどんと動いていく。しかし、遠くに見えるアグン山はほとんど動かずじっとしているように見えることだろう。

このように、ながめる位置が変わることによって、背景の物体（天体）に対しての手前に位置する物体（天体）の見かけの位置は、移り変わっていくことになる。このことは、月と背景にある天体との関係にも当てはまり、このような見かけ上のズレを“視差”と呼んでいる。

今回の「木星食」の場合、残念ながらバリ島からでは、月が木星の北側40’（2/3°）のところを通過してしまい、「食」とはならない。日本でも九州以南の地域では同様である。

しかし、その限界線上に位置する地域では、実に興味深い状況をながめられることになる。見かけ上、木星が月の縁を接線に沿って移動していくことになる（実際には月が移動）のだが、その最中断続的に月の山に隠されたり、谷から再び顔を出したりということを繰り返すことになる。もっとも、木星などの惑星食の場合、望遠鏡で見たその姿は恒星のような点光源ではなく、ある程度大きさを持った面積体であるため、月の山に完全に隠されるかどうかはその状況にもよるが、普段見ようと思っても、おいそれと見られる現象でないため、九州北部から中部にかけての読者はぜひとも注目してもらいたい。

これらの地域以北では、月の南半球が木星を隠しながら横切っていく様子をながめることができる。ただし、木星の月に対しての経路及び、潜入時刻（隠される時刻）・出現時刻（再び月の背後から現れる時刻）は、前述の視差のために、各地域によって異なってくる。（表1・図1参照）

通常の恒星の食の場合には、隠される天体が点光源のため潜入・出現は瞬間的に生じ、その時刻を極めて正確に求めることができる。ところが惑星食の場合、前述の通り面積体であるため、惑星が月縁（月の縁）に隠され始めてから完全に姿を没するまでに、数十秒から数分を要する。惑星と月縁とが最初に接した瞬間を“第1接触”といい、惑星の反対側の縁が月縁に接して完全に姿を消した瞬間を“第2接触”。同様に、月の反対側の縁に惑星の縁が接して、再び惑星の一部分が見え始めた瞬間を“第3接触”、惑星の反対側の縁が月縁に接し、完全に月の背後から離脱した瞬間を“第4接触”と呼ぶ。

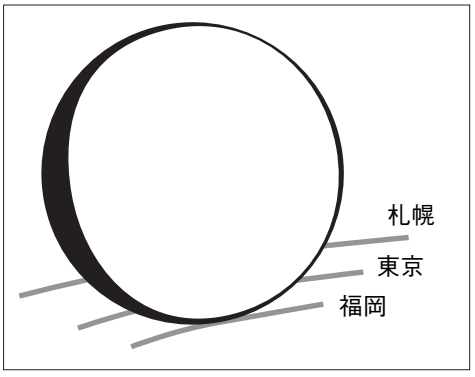
これらの時刻を正確に測定するには、多少の経験と鋭敏な反射神経とが要求されよう。さらに測定を困難とする原因は、水星を除いて（冥王星は不明）各惑星のまわりは、多かれ少なかれ大気で取り巻かれている。そのため惑星像がぼやけてしまい、正確な接触時刻を求めることが不可能に近い。

その反面、地球からの惑星の大気の厚さを測定したり、その組成をスプクトル観測によって推定する絶好の機会でもある。

一方、恒星食の場合は、その観測結果から、天文学というよりは地理学への貢献が唱われていた時期

観測地点	潜入		出現	
	第1接触	第2接触	第3接触	第4接触
札幌	9h 04.1m	9h 05.6m	10h 07.7m	10h 09.2m
仙台	9h 08.8m	9h 10.7m	10h 04.2m	10h 06.0m
東京	9h 11.7m	9h 14.0m	9h 58.5m	10h 00.7m
京都	9h 07.2m	9h 09.8m	9h 47.3m	9h 49.9m
福岡	9h 07.7m	9h 15.9m	9h 20.6m	9h 28.8m

▲表1：各地の「木星食」接触予報



▲図1：各地の木星食の様子（注：白黒反転像）

がある。掩蔽の正確な潜入・出現時刻を求めることによって、予め計算されている月の詳細な運動要素と照らし合わせ、これらのデータをもとに、逆に、観測地点の正確な経緯度及び標高などが求められるのだ。今日でこそ、レーザーや人口衛星による測地技術が確立しているものの、これらの技術が開発されるまでは、プレート・テクトニクスによる大陸の移動や自然現象や核実験などの人為的要因による地軸の不規則な変動など、さまざまな地球の出来事の影響を、天体観測によって求められていたのである。地球のことより、手の届かない天体のことの方が、詳細にわかっていることも多々ある昨今である。

今回はあいにく、バリ島滞在中の読者には無縁の天文現象となってしまったが、日本国内で新年を迎える皆さんには、「望遠鏡がないから」とあきらめず、各接触時刻の測定は難しいものの、双眼鏡でも「木星食」の様子を十分に楽しめるので、ぜひともチャレンジしていただきたい。（ただし、決して太陽をのぞかないよう、十分に気をつけること！）

注：実は12月2日にも、このときにはバリでも月の端を沿うように木星食が進行するのだが、やはり日中のことで、さらに30日のときよりはるかに太陽に近く極めて条件が悪い上、本号の発行には間に合わないため、解説を割愛しました。あしからず・・・・・。

ちなみに、「次回バリでも見ることのできる木星食は？」ということで筆者が計算したところ、1998年11月1日の真夜中、西の空低く傾いたところで起こることが判明した。一例として、東経115.2°、南緯8.5°の地点では、午前1時22分頃、月齢11の太った月の欠けぎわの方から潜入し、約45分間ほどの隠れんぼを楽しんだ後、ひょっこり顔を出す様子がながめられることであろう。

次回の木星食は、今回のものよりも、はるかに条件が良いため、バリ島在住の皆さんもしょげることなく、次回を楽しみにしていてほしい。

反対に次回は、沖縄はおろか、日本全国から、このすばらしい木星食をながめることはできないとこも判明している。「視差」のため、北緯22°以北では、月が木星の南側を通過してしまい、ギリギリのところをそれてしまうからである。その頃日本に戻っている皆さんは、“残念賞”といったところだろう。

2. 流れ星は上から降るもの？　下から降るもの？

皆さんは、流れ星（流星）をご覧になったことがおありだろうか。また、流れ星がどうのように流れるかをご存じだろうか？　なかには、「いまだかつて、流れ星など見たこともない」という方も、おられるかも知れませんね。

いつ、どこを流れるかも知れぬ気ままな流れ星をながめるのも、なかなか根気がいるものである。「流れ星が輝いているうちに、願い事を3回唱えられると、その願いがかなう」と、昔からまことしやかに言われているが、その真偽はともかくとして、せいぜい1秒足らずの発光時間内に実行することは、久米宏か黒柳徹子のような、よほどの早口の達人でないと、さぞや困難なことであろう。

ところで、この流れ星の正体だが、夜空を飾る星座を型どる星々（恒星）が、本当に落下してくると思っている（子供はともかく）大人は、まさかにいないだろう。

流星の正体は、宇宙空間を漂う砂粒ほど（大きくても角砂糖くらい）の宇宙のゴミや塵。これらが地球の引力で地球大気圏内に引っ張り込まれ、大気との摩擦でプラズマ状態になって発光したもの。一般的には、上空100～80kmくらいで輝き出し、大半は、50kmくらいに達するまでに燃え尽きてしまう。

それらのゴミは、いったいどこから来るのかというと、ほとんどが太陽のまわりをまわっている彗星（ほうき星）に源を求めることができる。

彗星とは、前号においても説明したとおり、“汚れた雪だるま”ともたとえられるように、極々微小の天体の表面が、真っ黒に近いほどに宇宙空間の不純物を含んだ氷に覆われた雪玉状の天体。それが太陽に近づくことによって、その表面が加熱、蒸発し、宇宙空間の掃除どころか、名前とはあべこべに、膨大な量のダストをその軌道に沿ってばらまき散らす。そのゴミだらけの彗星軌道面を地球が横切ったときに、全地球的には無数ともいえる“流れ星の素”が地球大気圏に飛び込んできて、夜空を飾る“天然花火”「流星群（りゅうせいぐん）」の出現となるわけだ。流星群とは、地球が毎年決まった時期に、ある特定の彗星の軌道面を横切るために生じ、その時期には普段と比べてケタ違い（普段は1時間当たり数個程度の流れ星出現数が、その限られた時期には数十個程度まで）に増加する。なかでも、毎年旧盆の8月12～13日頃にピークを迎える「ペルセウス座流星群」は、一般の方々にも特に有名。

また、流星物質をまき散らす彗星（母彗星）が、グルリと一回りして再び太陽に近づいた時期には、

平年よりも大幅に、流れ星の出現数が増加することになる。場合によっては、“流れ星の大安売り”的に、または雨のように降ったという記録もあり、このようなものを“流星雨（りゅうせいう）”と呼ばれる。

いずれにしろ、これらの流星物質は、どれも地球に対して平行に飛来してくる。ところがこれを地上にいる我々がながめると、天空のある１点を中心（「輻射点（ふくしゃてん）」もしくは「放射点」という）として、そこから四方八方へと飛び交うように見える。これは、実際には平行に走る鉄道のレールが、はるか遠くの方では１点に集まって見えることと同じ原理。

そして、この輻射点が位置している星座の名前をとって、それぞれの母彗星に由来するグループごとに「○○座流星群」と呼び、区分している。

今回ご紹介する流星群は、「りゅう座流星群」。りゅう座とはあまりきかない名前だろうが、場所的には皆さんよくご存じの（ハズ）の「北斗七星」のすぐ下側。午前４時頃ながめると、真北から北北東の空、地平線から 20° くらいのところに、柄杓を伏せた形の北斗七星を見つけ出せるだろう。その 10° ほど下がった暗い星々のならびが竜の尻尾。

この流星群の特徴は、毎年お正月の“お年玉”のように、１月２～４日未明にかけて見られ、ピークは４日の明け方少し前。天界の景気がよいときには、１時間あたりに 50 ～ 60 個くらい見られ、比較的明るい流れ星が、「あっ」という間もないほどの高速で一瞬輝く。なにしろ、平均時速 43km（時速 15 万 km）以上で飛び込んで来るのだから……。

もっとも、輻射点から一斉に流れ星が飛び出すわけではなく、実際には輻射点から数十度離れた地点から輝き出し、流れ星が出現する周期にはほとんど規則性がない。短い間にドカドカと降ることもあれば、しばしの間、ウンともスンともないこともある。

ところで、この「りゅう座流星群」をバリから見るとなるとどうなるか？　世間一般では、「流れ星も雨と同じように上から下に降るもの」と、頭から決めつけてしまっている方が多いようだが、実際には、そうとは限らない。例えば今回のように、輻射点が地平線上もしくは地平線ギリギリのような低い位置にある場合には、そこから「下」に流れる分は見えないことになるため、我々が見ることができるものは、「下から上」に流れるものか、横に流れたり斜めに流れるヘソ曲がりものばかりとなろう。ちょうど、“ドラゴン花火”のように……。それもそのハズ。ドラゴンの星座から流れるのだから。

来年（'95）は月明かりに邪魔されることもなく、絶好のコンディションで楽しめるため、皆さんも、あまりおとそばかりにしがみついておらず、暖かい南国でひと味違ったお正月を迎えてみてはいかが？

ただし、くれぐれも注意。４日とはいっても、４日の晩からの張り込みではありませんよ。３日の夜中から４日の明け方にかけての観測となります。ピークを過ぎるとまさに“後の祭り”。一気に出現数が激減するので、当日はできれば午前３時頃には、飛び起きよう。自信のない方は、え～い、めんどうだ。思い切って、徹夜してしまおう！

3. 流れ星の行方は……？

最後に、ちょっぴりゾ～ッとする話題を一つ。こんなことは滅多に起こることではないものの、万一、貴方が流れ星をながめているときに、普通の流れ星のようにスーッと夜空に線を引くことなく、ピカッと輝いたかと思う間もなく、１点に止ったまま、どんどん明るさが増してきたとなると……？

それは、その流れ星が、今まさに貴方めがけて落下して来ているためです。（Kalau bisa ですが）、ただちに鉄筋コンクリート造りの、頑丈な建物の陰に隠れましょう。このような特異な流星のことを「静止流星」と呼び、天文学者の間でも、もっとも恐れられている存在のひとつなのです。かく言う筆者も、今から十数年前に、この「りゅう座流星群」の観測中に、肝を冷やされた苦い経験があるのです。

注：もっとも、実際に地上まで達する確率は、それこそ天文学的に小さいものであり、またピカッと現れてから貴方に激突するまでには、おそらく２～３秒とかからないでしょう。静止流星を検出した次の瞬間には、直撃を喰らってあの世行きか、うまいことギリギリそれたとしても、あまりのショックで心臓麻痺を起こすか、そうでもなければ、「“静止流星”って、そりゃ何じゃい？」と、屁にも思わないか。これらが、一般的なリアクションのようです。

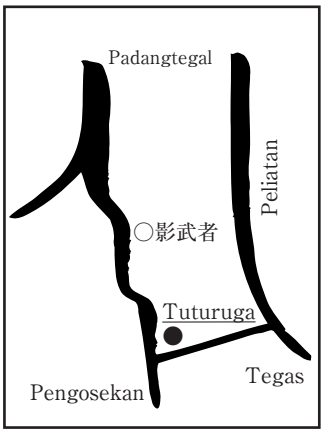
万一、運悪く流れ星に当たって死亡してしまった方は、くよくよせず、胸を張ってあの世に行きましょう。なにしろ、いまだかつて、隕石の直撃を喰らってあの世行きという人間は、人類が誕生し、記録を残す能力を持ってからこの方、洋の東西を問わず、現在までに一人もいないのですから。（「ニアミス」は時々発生している。要注意！）

日頃、星のことなどトンと縁もなく、天文学への貢献も何一つない方でも、立派に天文学の歴史に名を残すことが出来るでしょう。読者諸氏に幸運を！

Toko ◇ BEST 店

TUTURUGA

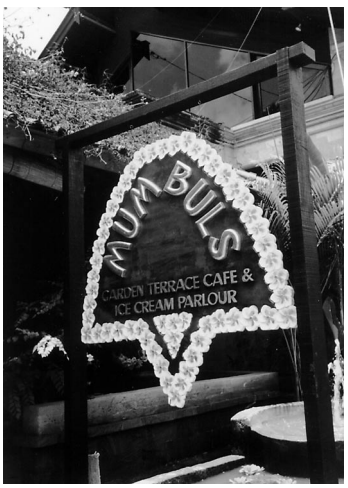
ありゃ？こんなところに感じのいい店が?! プンゴセカンからテガスへぬける近道の途中、へんぴなところに突然出現したTUTURUGA。インテリアとクラフトもののお店です。アンティークのデコレーション、カゴや日用品の小物など、品揃えはまだまだ種類が少ないけど、とってもオリジナリティーのある他の店にはないものがあります。よくBaliで、ウッドカービングなどの包装紙に使われる渋いベージュのごわごわした紙があるのですが、これが和紙ならぬバリ紙。漂白してない再生紙で、時々インドネシア語の単語が読める新聞の切れ端とか、稲のモミガラなんかが混じっていて、文明に毒されてしまっている私たちからみるととっても新鮮でおしゃれなのです。その手すきのバリ紙を使って、レターセット、メモパッド、スケッチブックなどにしたものをここで売っています。
日本の友人に買って帰るおみやげに悩んでいる人、パサールでさがしてもなんとなくドロくさくてパッとしないものが多いけど、そのバリ紙グッズは東京で売ってもウケるだろうと思われるセンスのよさです。ぜひのぞいてみてください。ただ、アンティークの家具の上に並べられたバリ人形（ぜんぜんかわいくない）は、いただけません。どうみてもお店の中でういてしまってて、そのせいかせっかくのおしゃれな店のコンセプトが台無しになっていたりして、まぁ、これもBaliかと思う反面、これからがんばってほしいなぁと思う店でありました。



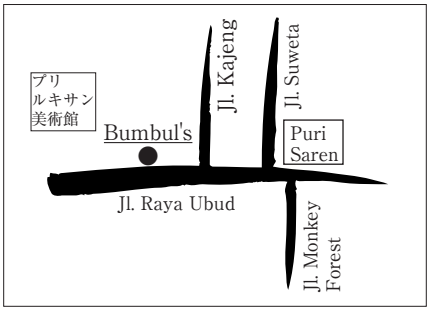
Pengosekan. Uburd, P.O. Box99. Ubud 80571 Bali, INDONESIA

Warung ◇ 味な店

MUMBUL'S



古くからあるUbudのレストランの中でも、最近改装してとってもおしゃれになったMUMBUL'Sは、外見ばかりでなく、メニューもがんばって充実している。なんといっても、ガーデンテラス・カフェ＆アイスクリームパーラーである。Baliの伝統芸能に憧れてやってきて、普段ワルンでしかゴハンを食べないような外国人女性でも、この手のカフェには弱い。プリ・ルキサン美術館の横、こじんまりした谷と下を流れるムンブル川が見下ろせる席をとる。メインストリートの喧噪がウソのような「えっ？こんなところに？」と思わず驚いてしまう木々の緑が涼しげだ。メニューはヨーロピアンあり、ローカルフードありで、特にナシチャンプール(4,500Rp)は超おすすめ。ツーリスト向けに変に味を変えたものではなく、地元のおふくろの味でしっかり勝負している。他のレストランでは味わえないおいしいお総菜が日替わりで出される。ちなみにある日のお総菜はこんな具合とちゃんぴんの茄で卵の本格的カレー煮添えとツのピンダブルグデル、甘辛テンペにクルプック。大満足的満腹。そしてきわめつけは冷たいデザート。アイスクリームはチョコレート、ストロベリー、バニラはもちろんのこと、モカ、ラムレーズン、アップルシナモン、ナンカ（イチ押しのオススメ！）、ココナッツ、アプリコットブランデーetc。シャーベットはマンゴ、レモン、メロン、パパイア、オレンジetc。さらにユニークなサンデー(パフェみたいなもの。)いろいろ。ううん、もはやがまんできない。こりゃ食べるしかない、と思わせるMUMBUL'Sでした。



Main Street Ubud, Bali / Near Puri Lukisan Art Museum Phone:975364

Pondok Manis

私の常宿

AGUNG RAKA BUNGALOWS

YUKARI-Y- 鈴木

たまにしか行けないBALI、初めてUBUDに滞在した時からここが大のお気に入りです。部屋に入ってみてその美しさに“結婚したら絶対新婚旅行でここにとまるっぞ！！”と堅く誓ったものですが、実を言うと大きな冷蔵庫にびっしりと詰まったBingtang Beerと大親友となってしまい、誓いを果たすことは二の次となってしまいました。
ここで過ごすと脳みそが溶けますよ。ー今日はなんにもしなかったなぁ…。そういえば昨日もなんにもしなかったなぁ…あぁカエルが鳴いている…なんて思いながらBingtang Beerを飲んでいるとすっかり心は洗濯済み。気をつけないとIQがかなり低下してしまっています。
私はここで5回ぐらいボケました…。このまんまじゃしょうがないっていうんで影武者行って食事したりするんですが（歩いて5分です）拍車をかけるだけになったりします。これがBALIのナントカMAGICか〜なんて勝手に思っています。（実はただのアル中か）
日本に帰るとギャップとの戦いです。体調までくずしてしまったり…。だけど心はRemember UBUD…恋する乙女のように毎日ため息をつくのでした。

Agung Raka Bungalows
Pengosekan, Mas,Ubud,Gianyar
Bali, INDONESIA　PO Box 61
PHONE : 62(0361)975757　Fax: 62(0361)975546

Pesan & Kesan

旅人一声

山下玲子

私は古めかしい者が好きである。昔祖父が使っていた万年筆、模様が剥げおちそうな、それでもデザインが昭和初期を思わせるかわいいカレー皿。この二つは私の「古めかし好きコレクション」の代表的な物である。“アンティーク”などという洒落た言葉とはかけはなれた、あったかいほのぼのとしている物に何故か惹かれてしまう。

幼い頃、お盆になると母に手を繋がれて母方の実家に行った。それは年一回の楽しい行事で、行く前には新しい服や靴を買い揃えてもらう。予算の都合でとても気に入った方は必ず諦めるハメになる。それでも一張羅となった服は、汽車の中では汚さない様に気を使われながら大事にされる。が、田舎に着くや否やスカートの裾はパンツのゴムにはさまれブルマーになり川で赤腹のイモリをとる体操服になってしまう。

と、そんなことを考えてしまうここは「UBUD」。UBUDの夜には祖父母がいた田舎を思わせる。ヤシは闇に隠され、月光に照る稲、田に飛び交う蛍、虫の音、何処からか聞こえる切ない調べ。泣き出したくなる程の懐かしさが私を包む。ふと気がつくと枕元に小豆大の黒い塊が落ちている。チチャックの活発な狩猟の跡だ。感傷的な気分をきっぱりと断ってくれるこんな間の悪さもUBUDの特色かもしれない。全部ひっくるめて私の好きなUBUDは、物でなく土地なので「古めかし好きコレクション」の欄外にチョ

これ なあ〜んだ?

Apa itu?

ヒント=

これはゴミではありません。古タイヤをリサイクルして作ったものです。

解答=

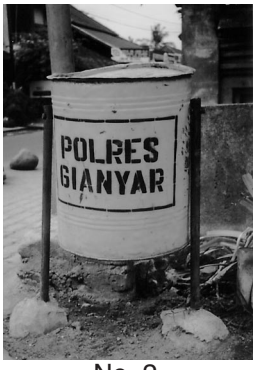
BALIの村のあちこちに設置されているというよりも放置状態のこの物体。一体これは何だろう？大きな鍋。いやいやそうではありません。これは古タイヤをリサイクルして作ったゴミ箱なのです。BALIの人々のユニークな着眼点にはいつも感心させられます。BALIの村によく似合うこのゴミ箱もBALIの近代化と同時にこのゴミ箱自体がゴミになってしまう時期がくるようで寂しい気がしますが、その時にはBALIらしいゴミ箱が登場していることでしょう。また村に個性があるようにたとえゴミ箱といえどもその村の特徴と調和するゴミ箱が作られることが望まれます。UBUDのゴミ箱はどんなデザインが似合うでしょうか？あなたも考えてみてください。

Peliharalah Lingkungan UBUD

UBUDの環境を考える

今のように、たくさんの観光客がUbudに来るようになるずっとずっと前、人々がポイッと捨てるゴミは自然にかえるものばかりでした。ごはんやお菓子を包んだバナナの葉、果汁を飲んだあとのココナッツのカラ、竹をほそ〜くさいたひも、そんなナチュラル・ラッピングも今まだ健在とは言え、最近は自然にかえらないゴミが急に増えてきました。できることならゴミをつくらないことがいいのですが、私たちが地球で生きている限りどうしてもゴミは出してしまいますよね。その時はどうすればよいか？はい、とりあえずドブや道に捨てず、ゴミ箱に捨てましょう。ゴミ箱に捨てられたゴミは、分別され、リサイクルされる可能性が大きいし、排水溝に詰まって洪水になることもないし。そんなわけで、今回はUbudのゴミ箱を特集してみました。古タイヤを再利用したゴミ箱が圧倒的に多い中、たまにドハデな蛍光色のプラスチックのゴミ箱もあって、これは少々興醒めかも…。竹でつくられたものは、アレンジしだいでUbudの村にぴったりのBagusなものができそう。ちなみにNo.5はギャニアールの向こう、Bangli県が統一して設置しているものです。いろいろあってユニークですね。

No. 1



No. 2

No. 3

No. 4

No. 5

その他のニュース

■ UBUD の PASAR・UMUM が OPEN!

私達の夜のいこいの場所だったUbudのナイトマーケット＝SENGGOLが閉鎖されたのが去年の11月。その跡地にいったい何が建つのか、長い間ナゾにつつまれていました。

そして総工費Rp. 646,898,000.-をかけてついに完成したのが、で〜んと立派な2F建てのPASAR・UMUM。公設市場とでも訳せばよいのでしょうか。Gianyar県の行政により、Gianyarの街の中、Sukawati、そしてUbud、この三ケ所に大きなPASAR・UMUMが開設されたわけです。建物の中の出店状況は、2Fの銀行の看板が目立つばかりで、賃借料が高いのか、いまだに出店されないスペースがほとんどです。建物の前の駐車場には、昼間のみいくつかの屋台が出ていますが、私達が期待していたSENGGOLは、やはり再開される見込みはないようです。あぁ、残念。

■ N.D.A. 探訪記

ムムッ?! N.D.A.とは？なにか重要なキーワードを持ったPuraの名か？と身構えた人、残念でした。なんのことはない、デンパサールにこれでもか‼とリニューアルオープンしたニュー・デワタ・アユというデパートのひやかしShopping記である。今となっては老舗となりつつも、いまだにNo.1の人気と実績を誇るティアラ・デワタには勝てる術もないが、とにかくデンパサールにはデパート（もどきも含めて）や大型〜中型ショッピングセンターがひしめきあい、しのぎをけずっている。…で、以前は閑古鳥が鳴いていたデワタ・アユも、ここで一大決心大改装をしたというわけだ。

1Fは例によってコスメティック、アクセサリー。他と変わりなし。

2F、メンズ。ハデめのおしゃれなシャツが多く、おみやげにいいかもしれない。KENZOがShopに出ていたので「はん、どうせニセモノに違いない」とシャツの値札を見ると、Rp.249,000.-。すっ、すいません。ごめんなさい。

3F、レディース。意外にもなかなかよい。麻を使ったかわいいShopや、ドロくさくないモダンバティックふうの品揃えがおしゃれ。

ここで非常に驚いた下着コーナー。日本でもディスプレーするだけで罪を犯したことになりそうな、どえらいパンティーなんかが、白昼、主通路ぎわに、威風堂々と、それも目の高さにぶらさがっているのだ。スケスケのギンギラの、細〜いヒモ状の、アレです。Tバックでいうんですか。い、いっ

たいどんな客層を想定しているのだ､ランジェリー担当者！ここはBaliだぞ。

そして、ホントはこれ！コレが書きたいがために、どーでもいいデンパサールのデパートのコトを、つべこべ書いたのだ。（声を大にして）ここの4Fのフード・コーナーにはソフトクリームがあるのですぅ。今までBaliのどこをさがしてもみつからなかった、あのソフトクリームがあるのですぅ。味はバッチリ濃厚で、ちゃーんと、機械からほどよい固さのがうねうね出てきます。お値段はRp.1,500ポッキリ。良心的じゃあござんせんか。ちなみに､同フロアで食事をするなら､チャイニーズフードコーナーでクウェッティオ・ゴレンを頼んでください。シンガポールのメチャウマ・ホーカーズの味に限りなく近い味です。他のコーナーに、おいしそうなものはひとつもありませんでした。

要は、3Fでエッチな下着を見て笑ったのち、4Fで美味なソフトクリームを食べる…と。

これがN.D.A.の究極の楽しみ方なのである。あなたもどうぞ。

■UBUD公衆電話事情

最近UBUDにもいくつかの公衆電話が設置され、村人達がよく利用しているのを見かけるようになりました。いずれも電話ボックスタイプではなく、フードのついたブースタイプで強いスコールの時、雨が吹き込みやしないかと少し心配になります。実際、UBUDに限らず、以前はどこの公衆電話も使えるのがめずらしいほど、ひんぱんに故障していました。今では多少改善されているようです。通話料は、以前50Rpコイン使用だったのが、現在は一律100Rpコインに切り替わりました。そして今、なんとパサール正面に、テレフォンカードが使える電話ブースまで（しかも4台並んで！）設置されたのです。UBUDの電話普及率もますます高くなり、便利になりましたが、なんとなく電話一本で用事がすんでしまうUBUDなんて、ちょっぴりさびしい感じもしませんか？

■バリの霊にとりつかれた！

1994年10月某日、妹の新婚旅行におじゃま虫した姉の和子さん（仮名：23歳）は、デンパサールの空港に降り立って2時間後、感動を噛みしめる間もなく、バリの霊にとりつかれてしまった。Besakihでのお祈りをするまでの一日半、彼女はまったく記憶がないという。「体の右半分が筋肉痛だけど」といたってケロッとしている。

新婚旅行の妹夫妻の話によれば、一日目のクタのホテルで寝ていると、ベットがガタガタと揺れるほど体を揺すり、突然国籍不明の言語を口走り、牛と鶏が鳴くような言葉には表せない奇声を発して、血の混じったあわを吐いたそうである。目は大きく見開いてはいるが視点は定まらず、浮遊しているようで、まさに映画「エクソシスト」を見ているようであったという。駆け付けたホテルの医師は原因不明と診断。これはやはりバリの霊にとりつかれたとしか考えられない。和子さんは日本では亡くなった父親の霊に見守られているのを感じるという。そして霊体離脱を経験したこともあるという。こんな素質が今回の霊がのりうつってしまった原因なのか。その後、和子さんはPura

の前を通り過ぎるたびになにかゾクゾクと感じ「バリってホントに不思議な所ねぇ」とつぶやいて帰っていった。

■ '95 バリカレンダー

出た出た、'95 のバリカレンダー！　早々にみなさんにお伝えします。

4 月 1 日　…Nyepi（ニュピ）、サカ暦 1917 年の新年です。
5 月 31 日　…Galungan（ガルンガン）
6 月 10 日　…Kuningan（クニンガン）
そして今年中にもう一度めぐってきます。
12 月 27 日 …Galungan（ガルンガン）
'96.1 月 6 日 …Kuningan（クニンガン）

さぁ、さっそく旅行のプランをたてましょ。ちなみに、極楽通信 '95 年版を申し込んでくださった方、もしくは継続の手続きをしてくださった方には、バリ・カレンダーをサービスします。
…が、数に限りがあるので、早目にお申し込みくださいね！
継続の方法は、Vol.5 に同封しました。　どうぞよろしく！

■あなたの声を！

極楽通信編集部では、あなたのリクエストを募集します。「この謎を解明して欲しい。」「こんな事が知りたい！」「こんな人を取材して欲しい。」「こーゆー企画どぉ？」などなど、何でもかまいません。どしどし、編集部までお寄せください。ただし、編集部の人間は聞いたそばからボロボロ忘れてしまうので、できれば手紙かFAXでお願いしますね。宛先は裏表紙のバリ本部または、日本連絡先まで。まってまぁ〜す！

【年間購読申込み方法】
エアメールで、その旨手紙をください。宛先は「影の出版会：伊藤」、住所は巻末の BALI 本部です。料金は、3,000 円。おりかえし申込み用紙と送金方法をお知らせします。また、お急ぎの方は、郵便振替用紙の通信欄に年間購読希望と書いて送金してください。振替先口座：00190-6-573859「影の出版会」です。

Name	Point	Adoress / Tel	
Semara Ratih	あのスマラ･ラティのリーダー、アノムそしてアユがコーチしてくれる。宿泊施設有。	Jl. Kajeng 25, Ubud Tel. 96277	ダンス、ミュージック
Puri Agung	プリアタンの王宮でも習えるのだ！宿泊設備有。	Peliatan	ダンス、ミュージック
Mandara	御存知､ティルタ･サリのご本家。宿泊設備有。	Peliatan	ダンス、ミュージック
Gunung Merta	日本語のできるバパ･イダ･バグース氏が相談にものってくれる。宿泊設備有。	Andon Tel. 975463	ダンス、ミュージック
Nata Raja	STSI（芸術大学）出身のワヤン氏は、マルチ･ティーチャー。	Jl. Sugriwa, No.20, Ubud	ダンス、ミュージック
Wayan Karta	カルタ氏本人はガイドだが、家族はダンサー･ミュージシャンが粒ぞろい！	Jl. Suweta, No.16, Ubud　Tel.975730	ダンス、ミュージック
Sanggar Centil Cili	STSI 出身のメンバーを中心に、スタッフもやる気満々。気軽に習えます。	Pengosekan, Ubud	ダンス、ワヤン･クリッ
Dewa Berata	あのスマラ･ラティのクンダン（名物男！）奏者。STSI 出身。お父さんから、4 人の兄弟みんな音楽一家。	Pengosekan, Ubud	ミュージック
Gusti Sana	SANA 氏独特の、カエル百態、ちょっとエッチなタッチ。とてもやさしい先生。	Pengosekan, Ubud	ペインティング
Budiana	D. ボウィーも持っている、ブディアナ先生の摩訶不思議な、エロティックなスゴイ絵、あなたも描けます。	Jl. Hanoman	ペインティング
Lantir	テガスのグヌン・ジャティの巨匠、パパ.ランティールが秘伝の技を伝えます。	Br.Tegas Kanginan No.53	ミュージック
Rino	一度観たら忘れられない、あの Tegas のケチャのワイルドマン、リノさんが教えてくれます。トペン、バリス、Bagus です。	Br.Tegas Kanginan No.50	ダンス

ぴんぐーばん

Pengumumaan

極楽通信 Vol.4 の山辺　否さんへ
あの「Oh! Tuhan」のつづきはどうなったのでしょう？
とっても気になって夜も眠れないでいるんですが…。次回を楽しみにしています。　匿名希望！

吉田由美さんへ
Vol.4 で結婚披露パーティの踊り子さんを募集した白猫めぐぴーです。パーティーも無事終えることができ、踊りの方もなかなか好評でした。本当に有難うございました。なお写真とビデオを送りたいので、住所を教えてください。ご連絡お待ちしております。
白猫めぐぴー

最近、当センターのオリジナル企画である「バリ島・星空ツアー」の偽物ツアーがでまわっているらしいという情報を入手しました。現在、詳細を調査中でありますが、くれぐれも「ニセモノ」に騙されないようご注意ください。
問い合わせ先：日本・0427-28-5775
バリ・62-361-974298
バリ天文教育センター

Terima Kasih

発行人：伊藤博史
編集：伊藤博史 ／ Yumi S. ／えりり／堀　祐一
エディトリアルデザイン：菅原恵利子
写真： 堀　祐一 ／ 菅原恵利子／伊藤博史
カバーアートワーク：菅原恵利子
ロゴデザイン：Hiroko S.
インドネシア語監修：Rianto S.

極楽通信「UBUD」Vol. 6
1994 年 12 月 25 日発行

発行・販売：影の出版会

Hiroshi Ito: d/a Pak Wayan Karta Wigraha
Jl. Suweta No.16,Ubud. Bali,
80571, Indonesia tel.(0361)96134

©1994　影の出版会　禁無断掲載

影の出版会事務局

● BALI 本部　Hiroshi Ito: d/a Pak Wayan Karta Wigraha Jl.Suweta No.16,
Ubud. Bali, 80571, Indonesia tel.(0361)96134

●日本連絡先　〒 106　東京都港区麻布台 3-4-4 Iikura Comfy Homes B-102
ポトマック株式会社内 , tel.03(3583)0801 fax.03(3583)0803